心の歌を奏でて

—婆娑羅—　㊤

芳田尚哉

　目の前は煌々(こうこう)としていた。
　空は真っ暗なのに、その場所は明るい。むしろ、明るすぎるくらいだ。
　空と街の時間がずれているようにさえ感じる。
　それは、人で溢(あふ)れかえっている事もあるだろう。
　なにかイベントでもあるのかと思ったが、そうではないようだ。というのも、人々に共通するものがない。それぞれが、めいめいに歩いている。
　ただ、誰もが陽気だ。
「すごいね、トールちゃん」
　隣にいるキヨカも、目の前の光景に唖然としている。
「そうだな。なんか、すげぇな」
　歓楽街(かんらくがい)だというのはわかる。
　既に呑んでいるのか、微(ほろ)酔(よ)い気分で歩いている人たちも多い。
　しかし、それにしても活気づいている。俺のイメージだと、もうちょっと落ち着いた感じなんだが……。
　誰も彼もが、楽しくて仕方ないという風だ。
　サラリーマンだけでなく、なんだか体にフィットしすぎな服を着た女の人が大勢歩いてる。しかも、その人たちは、必ずふわふわの羽のようなものがついた扇子(せんす)みたいなものを持っている。
「トールちゃん、いやらしい目してる」
「おいおい、そりゃないだろ。確かに見てたけど、ただ奇妙な格好だからだな……」
　キヨカは俺の目をじっと見る。
「そういう事にしておくよ。でも、確かにそうだよね。なんだか変だよ。みんな、中東の王様みたいな名前のお店とか、アメリカ女性の名前なんだか、日本の地名なんだか、意味不明の名前のお店からいっぱい出てくるもんね。しかも、同じようなお店がいっぱいだし」
「ああ。それに、みんなすっごい派手だな。なんだか、金持ちって雰囲気だし」
「そうだよ。成金みたいな感じだよ」
　言い方はともかく、確かにそうなんだ。みんなブランドものを持っているようだ。
　ここは金持ちの街なのか？　それとも、物価が俺たちの世界と違うだけなんだろうか。見た感じは日本なんだよな。話している言葉も日本語だし。歩いている人たちも、どう見ても日本人だ。
　でも、俺たちのいる世界とは違うんだから、色々と違うのかもしれない。
　そう思って財布を見る。
「……違うのか」
　しかし、財布に浮かんでいるこの世界での金額は、出発前と変わっていない。つまり、レートは同じらしい。

　不景気不景気だと言われ続けているが、俺たちからすればずっとそうなので、それが当たり前なんだが、好景気ってのはこういう雰囲気なのかな。
　確かに、今まで俺たちがいた世界じゃないらしい。
　そもそも、時間が違う。
　それに――なんとなくだけど、時代が違う気がする。
　俺たちの時代だと茶髪は普通だけど、ここの人たちは黒髪ばかりだ。たまたまなのかもしれないけど、それにしては多すぎる。それに、なんだかメイクなんかも、テレビでたまにしている昔の歌番組の映像みたいな、そんな雰囲気がする。俺からすれば、田舎っぽいというか、野暮ったいというか……。まあ、俺が化粧するわけじゃないし、言えるような立場じゃないんだが、どこか垢抜けていない雰囲気がある。
そもそも、メイクに興味があるわけじゃないけど。
「トールちゃん、ここって昔っぽいね」
　キヨカも同じように感じていたらしい。
「そうみたいだな。正確には、いつなのかわからないけど」
　時計があればな……と思った。
　なるほど、世界を移動した時しか使わなかったって、椎崎さんが言ってた意味がわかった。こうして世界を移動すると、どういう時代なのかを知りたくなる。その時に、あの懐中時計があれば、表示されているのですぐに解決するという事だったんだ。
「しくったな……」
　やっぱり、持ってくるべきだったかも。別に、今がどの時代でも、関係ないといえばないんだけど、気になってしまう。
　やっぱり、経験者の言葉はきちんと聞いておくべきだし、アドバイスには従うべきだと勉強になった。
「キヨカ、コンビニでも探そうぜ」
「そんなの探してどうするの？」
「コンビニだったらさ、新聞くらいあるだろ。それを見たら、今がいつなのかわかるだろ」
「なるほど」
　キヨカはポンと手を打つ。
「トールちゃんにしては、いい考えだと思うよ」
　なんだか素直に喜べないんだが、とにかくコンビニを探そう。こういう街でも、コンビニくらいあるだろう。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　人は多いのだが、誰に話し掛けていいものやら。
「トールちゃん、任せたよ」
　キヨカは早々と俺に委ねてきた。
　どうすりゃいいんだよ。俺だって、結構人見知りなんだぞ。フレンドリーに話すとか無理だって。しかも、相手はかなり年上だ。そんな人たちと、会話ってなかなかないからな。大学の授業とかゼミくらいだぞ。
　どうしたらいいんだ。
　誰にも話し掛けられないまま、歓楽街を歩いていると、
「ちょっと、君たち」
　向かいから歩いてきた誰かに話し掛けられた。女の人だ。
　ビクンと体が跳ねる。
　俺とキヨカは立ち止まる。
　いっそ、逃げ出したい気分だったが、足が動かなかった。
「ねぇ、その鞄(かばん)面白いね」
　声を掛けてきた女の人は、俺たちを気にする事なく喋っている。
「ちょっと見せてもらっていいかな」
　ひょこっと前に立たれる。
　ここでようやく顔を見た。
　黒髪のロングヘアーで、人懐っこい笑顔の女性だった。年齢はよくわからない。でも、二十代半ばくらいだろう。俺たちが知ってる時代と、化粧の流行が違うせいか、どこか野暮ったい感じだけど、若いのはわかる。
　よかった……。
　怖そうな感じじゃない。怪しそうな感じもしない。
「トールちゃん」
　キヨカが服を引っ張る。
「なんだよ」
　小声で話す。
「油断しちゃだめだよ」
　どうやら、女の勘とやらで、なにか感じているらしい。
「あの……」
「ん？」
　小動物のような笑顔だ。これにやられない男はいないんじゃないだろうか。
「なにかな？」
　うっ……。そういう風に訊かれると、言葉が出てこない。
「トールちゃん、しっかり」

「あ、ああ……」
　そう言ってはみたものの、どうしっかりすればいいんだろう。
「あ、あの……。あの、ですね……」
「なにかな？　その鞄、やっぱり大事なものだよね。そうだよね。私、別に怪しい者じゃないんだ」
　そう言って、女性は名刺を出してきた。
　そこには〝西部雅子〟と書かれていた。
「セイブマサコさん」
　書かれている名前を声に出す。
「ああ、よく言われるんだけどさ、西部(せいぶ)って書いてニシベって読むんだよね」
　なんだか、えらくフランクに話す人だな。まあ、年下相手だし、こんなものなのか。
「というわけで、西部(にしべ)雅子(まさこ)っていいます。怪しい者じゃないでしょ」
　名刺を渡されたから怪しくないのかというのは、そういうものでもない気がする。
　でも、相手の素性がわかったら怪しくないのか。
「君たちさ、面白い鞄持ってるよね。それってさ、どこかで売ってるのかな？」
　俺たちが持ってるのは、どこにでもあるトロリーバッグだ。そんな珍しいものじゃないんだが……。
　いや、ここは違う世界だった。この世界には、トロリーバッグはないのかもしれない。
「これは、どこででも……」
　キヨカが説明しようとしたので、慌ててその口を塞ぐ。
「おい、待てって」
「ん、んがっ。なにするんだよ」
「ちょっと来い」
　俺は西部雅子さんと少し距離をおく。
「トールちゃん、なに？」
「あのなぁ、なにを言おうとしたのかだいたいわかるけど、ここは俺たちがいた世界じゃないんだぞ。こんなの、俺たちからすれば当たり前にある鞄だけど、ここじゃないのかもしれない」
「そっか……」
　どうやらキヨカもわかってくれたらしい。
「時代が違ったら、ないものだってあるよね。世界もそうだし」
「そういう事だ。だから、迂闊な事は言うな」
「わかったよ。気を付ける」
　わかってくれてよかった。
　キヨカに説明し終えて、再び西部雅子さんの所に戻る。
「すみません。これは、俺たちが住んでいる所では、普通のお店で売ってるんですよ。でも、この辺ってないんですか？」
「そうね。私は初めて見たわよ。なかなかいい発想じゃない。鞄にコマをつけて、持ち運びを楽

にするなんて……」
　本当に初めてらしく、目がキラキラと輝いている。
「本当にすごいわ。もうちょっとよく見せてもらえないかしら」
「……まあ、いいですよ」
　そう言うと、西部雅子さんは、俺のトロリーバッグをベタベタと触る。
「すっごい。ここは普通にスーツケースみたいに持てるようになっていて、なるほど……こうして斜めにすると……すごい、ここは伸縮式なんだ。うっわぁ、できればもっと隅々まで分解して調べたいくらい」
　なんだか物騒な事を言わなかったか。
「でも……そうだ。ねぇ、この鞄、私に売ってくれないかしら」
「……？」
　突然の事に思考が止まった。
「そうね……こんな斬新な鞄だし、一〇〇〇〇〇円でどうかな？」
「あ、あの……」
　どうすりゃいいんだ。いきなり、鞄を売れって。しかも、提示してきた金額がすごいな。この鞄、確かセール品で、一〇〇〇〇円もしてないぞ。
「やっぱり、こんなすごい鞄、一〇〇〇〇〇じゃ安いよね。そうだな……三〇〇〇〇〇円でどうかな？」
　俺が安くて渋っていると思ったらしく、一気に三倍の額を提示してきた。
　なんなんだ。
　ここでは珍しいのかもしれないけど、それにしたって、その金額は安いものじゃないだろ。俺にすれば大金だぞ。それを、こうもあっさりと……。
　この人、すっげぇ金持ちなのか？
「あのですね……」
「まだ安い？　そうだな……手持ちはこれくらいだからな……。明日でよければ、もうちょっと出そう」
　なんだか、とんでもない事になりそうだ。
　っていうか、この人、手持ちがどうとか言ってたよな。今、この人は即金でそれだけ払えるって事なのか。
　名刺を見た限りでは、どこかの貿易会社らしいんだが、そんなに儲かってるのか。
「そうじゃなくてですね。これがないと、俺の荷物が……」
「じゃあ、明日、別の鞄を買ってあげる。だから、それを売ってくれないかな」
　どうしよう。
　救いを求めてキヨカを見るが、キヨカもどうしていいのかわからず茫然としている。
「すみません。これから、ちょっと長旅になりそうなので、この鞄がないと……」
　なんとか断らないと。別にこのトロリーバッグに思い入れはないんだが、普通の鞄だと移動の時に困りそうだ。

「そっか……。残念」
　西部雅子さんは、すごくしょんぼりしている。なんだか、悪い事をしてしまった気分だ。
「本当にすみません」
「ううん、いいのいいの。突然、大事な鞄を売ってくれなんて、そりゃ無理だよね。こんな素敵な鞄だもんね。もっと手持ちがあればよかったのにな……」
　金額が原因だと思っているらしい。
　そういえば、違う世界では、他の世界のものが珍しいから、高値で売れる事があるとか、椎崎さんが言っていた気がする。
　こういう事なのか。
　いきなり経験する事になるとは。
　確かに、こういう風に売れたとしたら、旅費の足しになるかもしれない。自分で稼ぐのもありかも。
　だとしたら、この世界でなにかめぼしいものを買っておこう。他の世界で、なにが珍しいのか、さっぱりだけど。いざって時に、売れたらいいだろう。
「残念だけど、この鞄は諦めよう。……でも」
　そう言って、俺たちをじっと見る。
「なんだか、君たちって面白そうだな……。ねぇ、これから時間ってあるかな？　私ね、今日は社長の付き合いで来たんだけど、退屈だから先に帰ってきたのね。だから、暇なんだ」
　訊いてもない事を色々と話し始める。もしかして、少し酔っぱらってるのか？
「こうして知り合ったのもなにかの縁だし、お姉さんがなにか奢ってあげるよ。ほら、行こう行こう」
　西部雅子さんが、俺の手を引いて歩き始める。
「好きなものとかある？」
「あ、あの……」
　俺は手を引かれたまま、どうしていいのかわからない。キヨカは、俺の後を不安そうについてきている。
　どこか、やばい場所に連れて行かれたりしないだろうな。どこか危険な事務所とか、勘弁して欲しいんだが……。
「そうだ。ここでいいかな」
　そう言って、突然立ち止まる。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

③

　なんの店かと見ると、鮨(すし)屋だった。立派な木の看板で〝青葉鮨〟とある。暖簾(のれん)もすっげぇいい雰囲気だ。
　……って、こんなマジの店は初めてだぞ。鮨つったら、回転する店だ。
「ここでいいかな」
　そう言うものの、俺たちの返事を待たずに中に入る。
「へいらっしゃい」
　と、威勢のいい声に迎えられる。
「うっわぁ……」
　思わず感心して、店内を見回してしまう。
　店はカウンター席のみだった。
　まさに、高級鮨屋って感じだ。
　お客さんが数人いるが、スーツ姿のナイスミドルばかりだ。まさにできる男って感じがする。
「トールちゃん」
　キヨカは俺の後ろで震えている。緊張してるのがわかる。
　俺たちは、なんだか場違いに思えてしょうがない。
「さあ、二人とも座って」
　西部雅子さんは、なんの気負いもないようで、店主らしい人の前に座る。
　ここって、大前だっけ？　そんな場所に座っていいものなのか？
「さあ、座って座って」
　俺たちは、彼女に促されてこそこそとその横に座る。俺の横に、キヨカがちょこんと座った。
　うっわぁ……緊張する。
　目の前のネタが入ったケースもそうだし、なにより店主が目の前だ。
　鉢巻と禿頭(とくとう)が似合っている。まさに、頑固な江戸前の職人って感じの風格がある。
　ちょっと、ここで食べる鮨って、いったいどれくらいするんだよ。
　さりげなく見るが、値段らしいものはどこにもない。
　まさか、全部時価ってやつなのか？
「らっしゃい。なに握りやしょう」
「そうね……。君たちはなににする？　好きなもの頼んでいいわよ」
　そう言われても、どれも高そうだ。
　かといって、なにもいらないってのは失礼だよな。
「それじゃ、俺は玉子と干瓢(かんぴょう)巻きを下さい」
　これなら安いだろう。
「ほぉ……通だね。玉(ぎょく)と木津(きづ)かい」
　すっごく感心されている。西部雅子さんも、うんうんと頷いている。
「そちらのお嬢さんはなににする？」

　キヨカは完全に頭が真っ白になっているのだろう。ぽかんとしている。
「私は……赤貝と螺(つぶ)貝をお願いしましゅ」
　……噛んだ。
　こいつ、噛みやがった。
　緊張すると、すぐにこうなるからわかりやすくていい。
「そちらのお姉さんは？」
「そうね……私は、とりあえず縁側をお願いします」
「へい」
　返事をすると、店主が握り始める。
「君ってすごいね。いきなりあんなの注文するなんて。大将、すっごいやる気になってるわよ」
　その話を聞いて、店主がこっちを見てにやりと笑う。
　うわっ。
　背筋に寒気が。
「玉子と干瓢なんて、その店の腕の見せ所じゃない。あなた、なかなかね」
「そ、そうなんですか」
　そういうつもりじゃなかったんだけどな。ただ単に、なんとなく高くなさそうだと思っただけで……。
「別に、そういうつもりじゃなかったんですけどね。ただ、俺って回転寿司にしか行った事なかったから」
「カイテンズシ？」
　西部雅子さんが首を傾げる。
　うわっ、もしかしてこの世界って回転寿司もないのか？
「私も、回ってないお鮨屋さんって、初めてだから、緊張してて……」
　キヨカも会話に入ってこようとしたが、その話題はやばいかも。
「ちょっと、回ってないお鮨って、むしろ回ってるお鮨ってなに？」
　西部雅子さんが興味を示した。
　目がキラキラしている。
「ねぇ、どんなお店なの？」
　身を乗り出して訊いてくる。
「なんだか、面白そうですね」
　へい、お待ちと店主が目の前に握った鮨を置く。
「ちょっと、聞かせてよ」
　この時になって、ようやくキヨカも気付いたらしい。俺たちは、かなりやばい状況かもしれない。
　ここは日本っぽいけど、やっぱり違うんだ。
　どこでどう違ってきたのかわからないけど、俺たちが知っている日本じゃない。かといって、昔だからってわけでもなさそうだ。

「あの……今日って、何年何月何日ですか？」
　俺の唐突で、へんちくりんな質問に、首を傾げられる。
「どうしたの？　今日は昭和六二年の五月十二日でしょ」
　昭和六二年か……。
　年号も俺たちが知っているものだ。だとしたら、そんなに過去ってわけでもないらしい。
「へぇ……今って昭和なんだ……」
　キヨカはかなり感心している。そういや、こいつは昭和を知らないのか。俺も、記憶にあるわけじゃないし。むしろ、俺だってこの年にはまだ生まれてないぞ。
「どうかしたの？　君たちなんだか色々と不思議だぞ」
「あ、いえ……すみません。なんでもないです。ちょっと、ずっと旅をしてたので、ふと気になっただけで……」
　そうなんだ……と納得してくれた。
　ここは過去だけど、俺たちが知っている過去じゃないらしい。
　少しずつ違っている。
　回転寿司ができたのは、むしろもっと昔だ。この時代なら、全国にチェーン店として今ほど多くはなかったにしろ、いくつかあったはずだ。
　そもそも、日本万国博覧会で披露されて話題になっているはずだから、知らない人がいるとは思えない。実物を見た事がある人は少なかったのかもしれないけど。
「ねぇねぇ、カイテンズシって、お鮨が回転しているお鮨って事よね。それって、どういう感じなの？」
　話を逸らすのは無理っぽい。
　これって、この世界の改変になったりしないだろうな。よく、過去に介入して未来が変わって問題になったり、時間警察みたいなのがいて、過去を改変する者を逮捕したり……って、ＳＦファンタジーの読みすぎか。
　これは、説明しないといけないっぽいな。
「と、その前に早く食べてみて。このお店のお鮨は、絶品だから。この街一なのは当然で、むしろ日本一だと思うんだよね」
　そう言われて、店主が照れている。
　うわっ。いかつい感じだと思ってたのに、なんだかイメージが違うぞ。
「それじゃ、いただきます」
　俺は箸を探したが、それらしいものはない。キヨカも探しているようだ。
　そんな俺たちの横で、西部雅子さんが手掴みで、鮨を口に運ぶ。
「……んっ、ん、おいひい」
　俺たちも、小皿に醤油を入れて……って、俺のは別にそのままでもいいのか。
　キヨカは緊張しながら、赤貝を頬張る。
「……んっ、なに、おいひぃ」
　口に入ったまま喋るな。

　俺も玉子を口に入れる。
「……んっ、んがっ、うまっ」
「トールちゃん、口に入れたまま喋らないで」
　俺は慌てて咀嚼(そしゃく)する。しかし、それすらもったいない気がする。これをもっと食べていたい。
「すまん」
　お茶で流し込む。すっげぇ、もったいない事をしたのかも。口の中に残っていた味が流されてしまった。
「すっげぇ旨い。こんなの初めてだ」
　回転寿司か、スーパーの総菜で売ってるようなものしか食べた事がなかった。こういう店ってこんなにすごいんだ。高いだけかとおもったけど、やっぱりそれにはそれだけの理由があるのか。
　俺たちは、誰かに取られるわけでもないのに、取られまいとそれぞれの鮨を食べる。
　玉子と干瓢がこんなに旨かったなんて。
　魚はどうなんだ。鮮度とかすごいんじゃないのか。
「なんだか、すっごい好評じゃない、大将」
　西部雅子さんは、にやにやしながら店主と話している。俺たちは、そんな余裕はなく、目の前の鮨を黙々と食べて、あっという間にたいらげてしまった。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

④

「次はなににする？」
　そう訊かれた時、また食べられるんだと思って、高揚してしまった。
「あ、でも……」
「遠慮しないで。むしろ、さっきの話を聞かせてよ」
「あっしも気になりますね。よければ、聞かせていただけませんか」
　店主もその気らしい。
「トールちゃん、どうするの？」
「どうするったって、話すしかないんじゃないか？　別に話しても問題にはならないと思うけど……」
「でも、他の世界に介入したらだめなんじゃないの？」
　なんだか、難しい話になってきたぞ。
「でも、ここで誤魔化せるわけないだろ」
「そうだけど……」
「変に嘘を言って、それこそ歴史を改変する方が問題じゃないか？」
「……そうだね」
　なにが正解なのかわからない。でも、ここまで話したら、話すしかないだろう。
「大将、大トロと鮑(あわび)を三人前」
　俺たちが戸惑っていると、西部雅子さんが注文していた。
　へい、と返事をして、握り始める。
　つうか、三人前って……。正直、ちょっと期待しちゃうんだけど。
　玉子と干瓢でこれだぞ。大トロとか鮑なんて、食べた事もない。
　じゅるりと口の中が唾でいっぱいになる。とても自腹じゃ無理だ。
「ねぇ、聞かせてよ。回転ってどういう事なの？」
　西部雅子さんはもとより、店主も聞き耳を立てているのがわかる。
「そうですね……単純にお鮨が回るんですよね」
「それがよくわからないのよね。どういう事なの？」
「えっとですね……。このくらいの広さのお店だと、カウンターの周りに、ベルトコンベアみたいなレーンがありまして、そこをお皿に載せたお鮨が回るんです」
「ベルトコンベアの上をお皿が……」
　西部雅子さんは、斜め上を見て考えている。どういう感じなのか想像しているのだろう。
「……なるほど、面白いわね」
　しばらく考えて、納得したらしい。
　俺たちは見た事があるからわかるんだけど、俺の説明でそれが通じてるのか不安だ。
「お待ち。……しかし、それだとネタによって値段はどうされるんで？　誰がどれを取ったかわからないでしょ」

店主がそれぞれの前に大トロと鮑の握りを置きながら質問してくる。
もっともな質問なのか。
カウンターで渡す分には、覚えればそういう事はないんだろうけど、レーンに流すとなると、誰がどれを取ったかはわからない。
それが不安なんだろう。
「それはですね。お皿の色で値段分けするんですよ。たとえば白は一〇〇円、黄色は一二〇円、青色は一五〇円、赤色は二〇〇円、金色は八〇〇円とか、そういう感じで。大きな格安店とかだと、一律で同じ値段にするのもありですよね」
「それはわかりやすいかもな。値段に応じて、色を分けた皿を用意するのか。それはいいアイデアだな。しかし、ずっとそんな所を回しているわけにもいかないだろ」
どういう事だろう？
「鮨ってのは、乾燥にはめっぽう弱い。すぐに取ってくれればいいが、ずっと回っていれば、乾燥もするってもんだ。そんなもん、食わせるわけにはいかねぇだろ」
なるほど……。職人だからこそなのか、当たり前の事なのか。俺には思いつかなかった。俺が行くお店では、そういうのがないから、その辺はよくわからない。
「そうですね……。俺が知ってる店は、そういうのがないしな……」
「そうだよね。あそこって、なにかで管理してるって聞いた事あるけど、私にもわからないよね」
「そういえばそうだな。俺たちも、その辺は素人だもんな」
解決方法がなにかあるのだろうか。乾燥を防ぐってのは、思いつきもしなかった。
「それならさ、なにかで覆っちゃえばいいんじゃない？」
「なにかで覆う？　どういう事ですか？」
「思いつきだけどさ、透明の蓋で覆うのよ。そうしたら、中身は見えるし、乾燥もしないんじゃないかな……って」
「なるほどな。見えるような蓋か。さすがに姉さんは女性だけあって、そういう発想がいいですね」
「こういうのを考えるのが好きなだけですよ」
なるほど……俺には全くない発想だった。単純だけど、それはいいかもしれない。
「でも、お客さんが、お皿を戻したらわからなくなるんじゃ？」
西部雅子さんが疑問を口にする。
そうか。俺たちは当たり前だけど、戻しちゃう人がいるかもしれないんだ。
「それは、きちんとルールを徹底させるしかないでしょうね」
こればっかりは、これを当たり前にするしかない。
「まあ、その辺は浸透させるしかないでしょうね。それにしても、こちらの兄さんは、なかなか面白い発想をされますね」
「そうでしょ。私も、さっき知り合ったんだけどね。まさか、こんな面白い話が聞けるなんて思ってなかったわ。なにかお礼をしないといけないわね」

「いえいえ、そんな……。俺たちは別にそんなすごい話をしたわけじゃないですし」
「なに言ってるの。充分すごいわよ。ねぇ、大将」
「そうですよ。謙遜しすぎです。これは、なかなかいいアイデアかもしれませんね。楽しく食べて頂けるなら、それに越した事はないですし」
「そうね。家族連れに受けるかもね。子どもなんか楽しめそう。もちろん、大人も」
　二人で楽しそうに話している。
　確かに回転寿司は楽しいよな。タッチパネル式で、ミニゲームがあれば、この歳になっても楽しんでたりする。
「でも、そうしたらこのお店の雰囲気が変わっちゃうわね」
「さすがに、ここを改装するつもりはありやせんよ。別に、それ専門の店を出すまでですよ。暖簾分けしてもいい腕の職人はいるんでね。若いもんに任せるのがいいでしょ」
「そうね……。せっかくだし、これってビジネスチャンスだし。この話、他でしないでもらえます？　私たちと大将で、挑戦してみませんか？」
「やりやしょう。……っと、あまりに面白くて、握りを忘れてましたね」
　店主は苦笑いをしながら、再び握り始める。
「へい、お待ちどう」
　と、俺たちの前に、大トロと鮑の握りが置かれる。しかも二貫ずつ。
　こんなの食べた事ないよ。
　恐る恐る、西部雅子さんを確認しながら手を伸ばす。
　本当に食べていいんだよな。
「さあ、いただきましょう」
　西部雅子さんは、躊躇なく鮑を口に運ぶ。
「うん、おいしい。このコリコリ感がいいのよね。それに、身がぷりぷりしてる」
「ありがとうございます」
　やっぱり、ネタがいいんだ。さすがってとこか。
　それにしても、やっぱり食べ慣れてるんだろうか。そうだとすれば、やっぱりお金持ちなんだろうな。若いのにすごいよ。
　俺とキヨカも目配せをして、鮑の握りを手に取る。
　緊張しながら、それを口に運ぶ。
「……っ！」
　んっ！　なんだ、これ。
　コリコリでぷりぷりだ。こんなの食べた事ないぞ。
　鮑ってこんななのか。そりゃ、旅館とか行けば、夕食に出すようなとこもあるみたいだけど、それもこんななのかな。
　そんなものを食べる事ができるなんて……。感動だ。
　隣では、キヨカも噛みしめるように食べている。
　すぐに飲み込むなんて、もったいなくてできやしない。

　それでも、ずっと噛んでいるわけにもいかず、飲み込むと途端に淋しくなる。
　食べるのがもったいないけど食べたいという二律背反なのだが、それでもやっぱりここで食べなくてどうするという事で、残り一貫となった鮑に手を伸ばす。
　反対側では、西部雅子さんが、店主となにかを話している。おそらく、さっきの回転寿司に関する事だろう。そんな彼女の前には、鮑も大トロも既にない。
　俺たちは、ただの貧乏性なのか、無くなるのを惜しみながら鮑を味わい、そして大トロを……って、
「なんじゃこれ」
　シャリがほろほろとほぐれるのはわかるのだが、大トロが口に入れた瞬間にとろける。
「トールちゃん、これ、なくなっちゃったよ」
　キヨカが口の中を見せてくれるが……、
「んなもん、見せるなよ」
　見たくもないぞ。
　しかし、驚くのはわかる。口に入れた瞬間、なくなるんだから。
　高い霜降りの牛肉とかもこんななのかな。テレビでよくこういうグルメレポートがあって、よくこんな事を言ってるけど、あれってマジだったんだな。そんなわけあるか、って思ってたのは間違いだったようだ。こんな食材があるなんて衝撃だ。
　ずっと味わっていたいが、すぐに無くなってしまう。
　全部食べてしまった。
　今まで鮑と大トロがあった場所を、物憂げに見つめる。
　こうしていても、戻ってくるわけはないけど、見ずにはいられない。
「トールちゃん、なにか食べてもいい？」
　キヨカがこっそりと訊いてくる。
　確かに、中途半端に食べると余計にお腹が空く。つうか、元々なにも食べてなかったからな。
　あんな旨いものを食べたら、もっと食べたいって思ってしまう。
「まあ、いいんじゃないか。金なら一応あるわけだし」
　俺たちの旅費を、こういう風に使っていいのかわからないし、高級すぎて使い切りそうで怖いけど、それでもこの誘惑には勝てそうにない。
　三大欲求だよな、食欲は。
「そうだよね。私たちだって、お金あるもんね」
「無駄遣いはできないけどな」
「でも……」
「わかる。俺もなにか食べたい」
　しかし、店主はずっと西部雅子さんと話していて、頼めるような雰囲気ではない。他の人でもいっか……と思っても、他の人も注文を受けて握っている。
　俺たちは、店主の客って事になってるのか。
　こんな高級そうな店なのに、客が多い。みんな、金持ちなんだな。

俺たちは、注文のタイミングをはかる。
「大将、ちょっと彼らに助言してもらいましょう」
「……ああ、そうですね」
どうやら、話が一区切りしたらしい。
「さて、姉さんが訊いている間に、なにか握りやしょうか」
おっ、ラッキー。渡りに船って感じかな。
「お嬢さんは、なににしやしょう」
「えっと……」
なにか食べようとは思っていたけど、これというのが思い浮かばない。
「えっと……私は鮹(たこ)と烏賊(いか)をお願いします」
おっ。なかなか財布にも比較的優しそうなネタだな。
「そちらの兄さんはどうしやす？」
「えっと……じゃあ、俺も同じで」
店主は、へいと言うと、早速ネタを切って握り始める。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

⑤

「ところでね、さっきの続きなんだけど」
　西部雅子さんが、真剣な顔で訊いてきた。
「はい、なんでしょう？」
「こういうカウンター規模なら、なんとかなるんだけど、やっぱり家族連れが多くなると、店内の広さも必要になるでしょ。そういう時って、どういう風にしたらいいと思う？」
　なんだか大雑把な質問だな。
　俺たちには結構当たり前のようにあるけど、元々ないからイメージがしづらいのか。
「えっとですね……」
　俺はメモとペンを取り出す。
「俺も本職じゃないし、客としてだけなので詳しい内部は知らないんですけど……」
　そう前置きして、ペンで下手くそな絵を描いて説明する。多分、こんな風になってるんだろう……と想像したレーンの形だけど。
　店の片側にキッチンがあって、そこからそれぞれレーンが延びているものだ。中で、もしかしたら繋がって留のかもしれないし、本当に分かれてるのかがわからない。
「なるほど……」
　西部雅子さんが頷く。
「しかし、これですと、流れていないネタの注文が難しいですね」
　店主が身を乗り出して俺の絵を見ながら言う。
「えっとですね。それはインターフォンみたいなのを設置して、それで注文を受ければいいと思います」
「それは別に誰かが持っていくの？」
「いえ、レーンに流せばいいんです。どのテーブルの注文かわかるようにして。もちろん、誰かが運んでもいいと思いますけど」
「なるほど……」
　店主が納得する。
「これを元に、色々と試作してみないとね。まずは、お鮨を流すレーンを作ってみましょうか。お店のレイアウトは、それからでも大丈夫だし。これは流行るわよ」
「そちらは、姉さんにお任せしましょうか。こちとら、鮨しか握れやせんから」
「ビッグプロジェクトになるわね。社長に話して、早速取り掛かりましょう」
　と、そう言った時、西部雅子さんのポケットから、なにか電子音が聞こえた。
「誰からかしら」
　そう言うと、西部雅子さんがポケットから煙草の箱……よりは少し小さいくらいのものを取り出す。
「あっ、社長からだ。大将、電話貸してもらえます？」
「はいよ」

「ありがとう」
　そう言うと、カウンターの奥の方にあるピンク色の電話に向かう。
「あれ……なに？」
　キヨカが小声で訊いてくる。
「さぁ？　なんだ？　携帯じゃなさそうだし」
　見当もつかない。この世界にしかないものなんだろうか。
　その疑問もあったけど、とにかく目の前の美味しそうなネタの誘惑には勝てず、穴子に手を伸ばす。
　これも、脂がのっていて、初めての食感だ。本当に、今まで俺たちが食べていたものはなんだったんだ？
　確かに、西部雅子さんが勧めるのもわかる。これは旨い。
　それと同時に、高いんだろうな……と思ってしまう。
　ほろほろとほぐれて、あっという間になくなってしまう。
　俺たちは、最後の鰻もゆっくりと口に運ぶ。
　これも旨い。
　たまらない旨さだ。
　脂がのっているが、しつこすぎずあっさりとしている。
　タレも甘すぎず濃すぎず、鰻の味を引き立てている。
　俺たちは料理評論家じゃないし、料理研究家でもないただの素人だが、この味の秘密を知りたくなってくる。
「お待たせ」
　俺たちが味に感動していると、西部雅子さんが戻ってきた。
「社長に話したら、かなり乗り気になって、私主導でプロジェクトが立ち上がる事になりました。大将にも協力をお願いして、もしよければあなたたちにも協力をお願いしたいんだけど」
　と、俺たちを見る。
「もちろん、報酬は約束するわよ。どうかしら？」
　協力するのは吝(やぶさ)かではないのだが、俺たちの旅は、俺たちの自由にできるものじゃない。
　個人的には、報酬はともかくとして、面白そうなので協力してみたい。だからこそ、余計に悩んでしまう。
「えっと……俺たちは旅の途中で……ずっとってわけには……」
「そっか……。そうだったわね」
　西部雅子さんは、残念そうにため息を吐く。
　そして、気を紛らわせるかのように、穴子を頬張った。
「約束はできないですけど、予定が決まってる旅じゃないので、大丈夫そうなら連絡します。それでもいいですか？」
　このまま素知らぬ顔はできそうにない。

俺たちの都合じゃなくて、蟲(ベステート)次第なんだが、少しくらいは大丈夫だろう。
「ありがとう。えっとね……名刺はさっき渡したよね。そこでいいわ」
「そうですか」
俺は受け取った名刺を取り出す。そして、いつもの感覚で、番号を登録しておこうと携帯を取り出した。
「ちょっと、なにそれ」
携帯を取り出した瞬間、西部雅子さんが俺の手をがしっと掴む。
「あ、え、な、なに？」
突然の行動に、俺はなにがなにやらわからない。
「ちょっと、なによそれ」
ぐいっと腕を動かされる。そして、西部雅子さんは、携帯に顔を近付ける。
「うぉっ」
なんなんだ？
「ねぇ、これってなに？　ポケベルじゃないわよね」
ポケベル？
なんだか聞いた事のない単語だ。
「あの……これって携帯電話ですよ」
キヨカが驚きながらも説明する。
そうだ。別になんの変哲もない携帯電話だ。ちょっとばかり昔の機種かもしれないけど、そんな珍しいものじゃない。
……って、ここは俺たちがいた世界じゃなかった。
気付くのが遅かった。
この世界では、トロリーバッグも回転寿司もないんだ。
携帯電話だってないんだ。だから、こんな風に……。
「嘘。携帯電話って、もっと大きいものでしょ。こんなに小さいものなんて、聞いた事もないわ。一応、実物を見た事があるけど、大きめのバッグくらいの大きさだったわよ」
バッグくらいの大きさ？
なんだ、それ。
全然、携帯って感じじゃないぞ。
ふと思い浮かんだのが、外国の戦争映画に出てくる、軍隊の通信兵が持っている通信機だった。あれも、肩から背負って、かなり大きかった気がする。
でも、ちゃんとこの世界でもあるんだ。
「えっと……その……」
この世界にないものを説明するのは難しい。それは、回転寿司だけで充分だ。
「ねぇ、ちょっと見せてくれない？」
「えっと……ちょっと、それは……」
奪われたら、適当な操作をされそうで怖かった。別に見られたらまずいメールはないけど、消

されでもしたら大変だ。それに、適当にいじられて、変なところに電話でもされたら……。
「すみません。これは、ちょっと……」
　俺は取られまいとする。
「……そっか」
　抵抗すると、西部雅子さんはあっさりと腕を放してくれた。
「携帯電話って、私が知っているものじゃない。それに、こんなすごいアイデアだってある。ねぇ、あなたたちって何者なの？」
　真剣な顔で訊いてくる。酔っている感じはない。
「あの……えっと……」
　正直に答えられるはずがない。
　どうしたらいいんだ？
　キヨカが不安そうに、俺の服を掴んでいる。
「その……」
　なにも思い浮かばない。適当に嘘の身分を言えばいいんだろうけど、パニックになって頭が真っ白だ。
「えっと……」
　……どうしよう。
　俺が困惑していると、西部雅子さんは正面を向いてため息を吐く。
「ごめんなさいね。なにか理由があるんだよね」
　どうしたんだろう。
「きっとあなたたちは、私なんかが身分を訊いちゃいけないんでしょうね。大企業の開発に関わっているとか、私の想像もできないような立場なんでしょうね」
　当たってはいないけど、全部が間違いでもない。
「それにしても、私なんかにこんなアイデアを聞かせるなんて、ちょっと腑に落ちないわね。なにかさせようと画策でもしてるのかしら」
「えっと……その……」
　思わぬ方向に話が展開していく。
「あのですね。私たちはちょっと遠い所から旅をしていて、たまたま今日はここに立ち寄ったんです。なので、この辺の事とか、そういうのがよくわからなくて……」
　キヨカがナイスフォローをする。
　適当な話っぽいが、嘘でもないのが不思議だ。
「遠い所ね……。外国か……。でも、あなたたちって、どう見ても日本人だし……。あ、ごめんなさい。詮索しちゃいけないのよね」
「すみません。ちょっと理由があって、俺たちの事は話せないんですが、別に西部さんが考えているような事はないです。それに、俺が話した事は企業秘密でもなんでもないですし、回転寿司だって、さっき初めて話したので……」
「じゃあ、他には話してないのね」

　西部雅子さんが妙に食いついてくる。
「は、はい。それはありません」
　そう言うと、よし、とガッツポーズ。
「私たちの独占プロジェクトよ。外国じゃ、そもそもお鮨ってないだろうし、これは私たちが先駆者になるチャンス」
　なんだかメラメラとバックに炎でも見えそうなくらいの勢いだ。
「でも、不思議よね。そんな画期的な携帯電話を持ってるのに、ポケベルを知らないなんて……。あ、ごめんなさい、つい……」
「いえ、いいですよ。それにしても、ポケベルってなんですか？」
　俺が訊くと、本当に知らないんだ……と驚かれた。
「私も気になります」
　女の子だからなのか、こういうのには興味があるらしい。流行しているものが気になるんだろう。
「これはね。簡単に言えば、電話から文字を送れるのよね。一番最初は文字は無理で、数字だけだったんだけど、最近は文字が受信できるものもあるの」
「文字を送る？」
　全然わからない。メールみたいなものなのか？　でも、それにしても普通の電話からじゃ無理だろ。
　なにか特殊な電話があるんだろうか。
「どうやって送るんですか？」
　キヨカも想像できないらしい。
「平仮名だけなんだけどね、こういう表があって、ボタンを押せばいいの」
　そう言って、なにか小さな紙を見せてくれた。
　そこには五十音表があり、縦横に数字が書かれている。
どうやら、数字の交差した文字が送れるらしい。〝１・１〟だと〝あ〟で、〝１・２〟だと〝い〟で、〝４・１〟だと〝た〟という風になっている。
「へぇ～、面白いですね」
　メールの方が楽だとは思うけど、これはこれで面白い。
「でもね。まだまだダイヤル式の電話が多いから、なかなか外では難しいのよね。プッシュ式の電話じゃないと使えないのよね。それに、文字は送れるんだけど、主に呼び出しに使われるのが多いかもね」
「呼び出し？」
　どういう事だろう？
「ポケベルはね、最初は掛けてきた相手の番号を表示するだけだったの。だから、今でもその機能はあるわけね」
　どうやら、ポケベルにはそれぞれ電話番号のようなものがあり、普通の電話からそこに掛けると、掛けてきた番号が表示されるらしいのだ。

ナンバーディスプレイはできるのか。
そのシステムで、会社なんかの外回りの時に、なにか連絡が欲しい時に会社が連絡してきたりするそうだ。
掛かってきたら、公衆電話などから掛け直すらしい。
なんだか、面倒な感じがするな。
携帯なら、メールはもちろんだし、電話もすぐに掛けれるのに。
やっぱり、技術が違うらしい。
この世界の携帯電話は、確かに携帯できるけど、かなりの大きさがあるため、普及はしていないようだ。それよりも、機能は制限されるけど、小型のポケベルが人気らしい。
世界が違えばこうも違うのか。
同じ世界に思えても、やっぱり違いはあるらしい。
「さてと。まだ食べ足りなかったら、なんでも頼んでちょうだいね。ちなみに、遠慮しなくていいからね。いい話を聞かせてもらったし、そのお礼なんだから」
俺たちは遠慮しながらも頷いた。
朝から……というか、俺たち的には朝なんだけど、なにも食べてなかったし、ここの鮨があまりに美味しすぎるのもあり、まだまだ食べれそうだ。
でも、値段を考えると、そう簡単に注文できるものじゃない。キヨカも注文していいのか、躊躇している。
「大将、まだまだ若いから大丈夫みたいだし、この二人に適当に握ってもらえないかしら」
「かしこまりました」
俺たちが遠慮していると、西部雅子さんが注文した。
ここで断るわけにもいかず、俺たちはされるがままになる。
おまかせコースなのか、次々と一貫ずつ並べられていく。
「そのくらいなら食べれるでしょ」
と、西部雅子さんはお茶を飲みながら笑う。
結局、俺たちの前には一〇貫の鮨が並んだ。
「どうぞ。遠慮しないでいいから」
俺たちは、お礼を言ってそれぞれ鮨を堪能した。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　さすがに腹も膨れて、まだ食べたいのだがもう食べれないという状態だ。
　こんな美味しい鮨は、今度はいつ食べれるんだろう。もう、一生無理なのかもしれない。そのくらい美味しかった。
「じゃあ、おあいそお願いね」
　と、西部雅子さんが精算をすませる。
「あの……ご馳走様でした」
「ご馳走様でした」
　俺たちは深々と頭を下げる。
　いったい、どのくらいの金額になったのか、どうしても気になってしまう。
「いいのよ。もしよければ、電話ちょうだいね。本当ならこっちからしたいけど、旅の途中じゃ難しいわよね」
「すみません」
「ううん、いいのよ。これから試行錯誤していくわ。絶対、成功させるんだから」
　西部雅子さんは、やる気になっているようだ。
「俺たちも、協力できるようならさせてもらいます」
「うん、期待してるわよ。そうだ。今日はどこに泊まるの？　送っていくわよ」
　あっ……。
　そう言われるまで気付かなかった。
　俺たちにすれば、今はまだ昼間の感覚だ。でも、この世界じゃ夜中らしい。
　これも時差なのかな。
　もちろん、泊まる場所なんて考えてなかった。
「えっと……その……」
　キヨカにどうするのか訊こうとするが、キヨカも同じで考えてなかったようだ。
「あの……。まだ私たち、ここに来たばかりで、そういうのは……」
「そうなんだ。じゃあ、どこか適当な宿にでも案内するわね」
　そう言うなり、タクシーを止めて乗り込む。
「さあ」
　俺たちは促されるまま、タクシーに乗り込んだ。

　連れて行かれた場所は、なんだか派手な外観のホテルだった。
　こんな都会じゃないだろうけど、老舗の旅館みたいな場所だったらどうしようかと思っていただけに、ちょっと安心した。
「ここくらいしかなさそうね。ちょっと待っててもらえますか？」
　と、タクシーの運転手さんに告げて、俺たちを引き連れて中に入っていく。

「二名で一泊なんですけど」
「大丈夫ですよ」
　そんな簡単なやりとりで、俺たちの宿泊場所が決定した。ちなみに、知らない間に、精算まですまされていた。
　なんだか、なにからなにまで西部雅子さんのお世話になっている。
「じゃあね。おやすみなさい」
　そう言うと、タクシーに戻っていった。そのまま会社に戻ったのかもしれないな……なんて思った。
　そして、俺たちはといえば……ぽつんとホテルのロビーに残された。
「どうする？」
　そう訊いておきながら、なにをなのかはわからない。でも、とりあえず訊かずにはいられなかった。
「……とりあえず、寝ようか」
　おいおい。俺たち的には昼なんだけどな。
　でも、この世界じゃ夜なんだし、その方がいいのかな。
「お腹もいっぱいになって、ちょっと眠いし。寝ようよ。どうせ、夜だったらなにもできないよ」
　あれだけ寝たのに……と言いたいところだが、実のところ、俺も眠かったりする。
「そうするか。蟲(ベステート)の情報は、明日だな」
「そうだよ」
　俺たちは部屋に向かった。
　今までの感じだと、騒ぎにもなっていないので、まだ蟲(ベステート)の被害はないのだろう。
　目撃者や情報を得るにも、人がいないとどうしようもない。確かに外にはいるけど、酔っぱらい相手は無理だろうな。
　起きたばかりなのに、また寝るというこの贅沢な感じ。そして、こうして感覚が狂っていくんだろうな。
　海外旅行は経験ないけど、時差があるとこうなんだろうな。
　なんとなく携帯を見たが、圏外だった。
　そりゃそうだ。世界が違うんだから、電波なんて入るわけがない。
　それに、時間は俺たちの元の世界のものだ。これもあたりまえだ。世界が変わったからって、時間表示が変わるはずがない。
　これだったら、なんの意味もないじゃんか。
　キヨカとすら電話できないし、メールもできない。この旅じゃ、携帯って完全に無用の長物だ。
　持ってきた意味がない。
　旅に出る前は、時間なんか携帯でなんとかなると思ってたけど、これじゃなんの意味もないんだよ。

　やっぱり、あの懐中時計を借りておけばよかった。
　ちょっと後悔していると、部屋に到着した。
　ガチャガチャと鍵を開けて中に入る。
「「……」」
　俺たちは絶句した。
　なんだかピンクの照明で、部屋の中が奇妙な雰囲気だ。
　大きなベッドがあって、他にはなにもない。
　ビジネスホテルに泊まった事はないけど、絶対こんなのじゃない。
　むしろファッションホテル――ラブホテルじゃないのか、これって。行った事はないけどさ。
「トールちゃん、これって……」
「なにも言うな。俺だってどうしていいのかわからん」
「私、まだトールちゃんとそういう関係は……」
「安心しろ。そういう気は毛頭ない」
　ぴきっと音がした気がした。
「それはそれでムカつくよ」
　隣のキヨカを見ると、顔がひきつっている。
　おいおい。どうすりゃいいんだよ。さっぱりわからない。
　俺は適当に荷物を置くと、ベッドに腰掛ける。
　まだ始まったばかりだけど、色々とあった気がする。
　でも、よく考えてみれば、鮨を食っただけなんだよな。一日も経ってない。まだ数時間だ。感覚的には、まだ昼過ぎって感じなんだよな。でも、この世界では夜中だ。
　夜中のはず……だ。
　ベッドに時計があったので確認する。
　うん、やっぱり夜中だ。ちょうど日付が変わろうとしている。
　それにしても、まだまだこれからって感じだよな、あの賑わいだと。
　夜の世界はこれからなんだよな。
　みんな、夜明け近くまで騒ぐのかね……。
　別に規則正しい生活ってわけでもないし、ゼミの先輩の付き合いで、居酒屋で朝までってのもあったけどさ。さすがに毎日はきつい。翌日は大変だったもんな。
　それにしても、最初から突飛な世界じゃなくてよかったと思う。この世界なら日本みたいだし、不自由もないだろう。全然文化が違う場所だったら、野垂れ死んでいたかもしれない。
　違う世界も楽しそうだけど、最初からはきついよな。今でも、結構だし。そのうち、俺たちの常識が全く通用しない世界に行く事もあるんだろうな。ここだって、俺たちの認識とかなり違うけど。
　この世界のどこかに蟲(ベステート)がいる。
　俺たちは、それを封印しないといけない。
　でも、こうしていると実感がないな。

蟲(ベステート)のせいで、騒ぎになっている様子はない。まだきちんと話したのは、西部雅子さんくらいだけど、特にそういう雰囲気はなかった。
もし蟲(ベステート)が暴れていたら、ニュースになってるだろうし、あんな風に回転寿司の開発をしていたりできないだろう。街の様子も、賑やかで平和って感じだった。気持ちよく酔っぱらっている人たちばかりだった。
「本当にいるのかな……」
ばたんとそのまま後ろに倒れる。
ベッドのスプリングが気持ちいい。
なかなかいい部屋かもしれない。
ただ、ベッドが一つというのが……。
本当にここで一緒に寝るのか？　っていうか、どうしてあの人はこういう部屋にしたんだ？
この世界だと、これが当たり前なんだろうか。
それとも、やっぱりなにか勘違いしているのか。
どちらにせよ、現在はこうなってしまってるわけだ。
中途半端に知り合いだったら気まずいだろうな。例えば、同じゼミの人とか。でも、相手はキヨカだしな。
「……」
キヨカはなにも言わずに、俺の横に座る。
やっぱ、ここってそういうホテルなんだろうな。
西部雅子さんは、とんだ誤解をしてくれたもんだ。
キヨカがベッドに横になり、俺を誘うような手の動きをしてやがる。
「トールちゃぁん、きてぇ～」
「……」
言葉が出なかった。
なにをしてやがるんだ、こいつは。
「莫迦(ばか)か、お前は」
冷たく言い放ち、なにか飲み物がないか冷蔵庫を開ける。
「……アルコールしかない」
ん？　ちょっと待て。もしかして……。
ゴミ箱や部屋の中を見る。
なさそうだ。
冷蔵庫の中を見る。
特に減っていないようだ。
「はぁ～」
よかった。
どうやら、アルコールで酔っているわけじゃないらしい。
「……って、こっちの方がまずいだろ」

「トールちゃん、なに言ってんの？」
　キヨカは相変わらずのポーズだ。
　どうすりゃいいんだよ、この状況。
　こいつは、素面でこんな事をしてるんだぞ。
　据え膳食わぬは……とか、そんなのどうでもいいんだ。そもそも、そういう関係じゃないんだっての。なりたいと思った事もない。
「お前な……わかってしてるのか？」
「当然だよ。私はオッケーだよ」
「……莫迦も休み休みにしとけよ」
　冗談でも本気でもどっちでもいいんだ。とりあえず、無視するに限る。
「トールちゃん、意気地なし？　それとも不能？　もしかして……同性愛者？」
　聞き捨てならない事を言われてるが、反応したら負けだ。
「女の子が誘ってるんだよ。女の子に恥をかかせても平気なの？」
　相手がキヨカじゃなかったら、俺だって遠慮なく……。だって、男の子だもん。
　しかし、相手が問題だ。
　そういう気にならないし、なったらなったで色々と命の危険が……。特にじいさんからの。
「とにかく、もう寝るぞ」
　スーツケースから適当にＴシャツとスウェットを取り出して、それに着替える事にする。
「これでよし」
　今日着ていた服は……。まあ、なんとかしよう。そもそも、まだ実時間だと半日も経ってないし。明日も同じでも問題ないだろう。
　着替えて、服は畳んでスーツケースの上に置いておく。
「じゃあ、俺は寝るわ」
　部屋の隅に、小さなソファがあったので、そこで寝る事にする。
「トールちゃん、ベッドで寝なよ」
「おやすみ」
　なにか言えば、長くなりそうだったので、問答無用で話を終わらせる。
「トールちゃん、ノリが悪すぎるよ。もうちょっと、反応してくれないと、女としての自信なくなっちゃうよ」
　キヨカがなにかを言っているようだが、俺は無視して目を瞑(つむ)る。
　起きてから時間は経ってないが、疲れたし、お腹もいっぱいになったしで、思ったよりすんなりと眠れそうだ。
「トールちゃん……。本当に寝ちゃったの？」
　そんなキヨカの気配を感じながら、俺は夢の世界へダイブした。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　すっと目が覚めた。
　普段だとあり得ない感じだ。
　特に悪夢にうなされたわけでも、誰かに起こされたわけでも、目覚まし時計が鳴ったわけでもない。
　不思議と、目が覚めた。
　あまりにすっきりしていて、本当に起きたのかわからないくらいだ。もしかしたら、ここは別の世界なのかもしれない――そんな風にすら思えてしまう。
　実際、別の世界に移動しているので、現実味がないわけじゃない。そういう事があっても、不思議じゃない状況にいる。
　だからこそ、余計に不安になったのだが、目を開けて周囲を見ると、俺が眠った時と変化している様子はない。
　俺はソファに寝ているし、キヨカはベッドで眠っている。
　こんな眠りにくそうなソファだったのに、ぐっすりだったって事は、それだけ疲れてたって事なんだろうか。俺自身が気付かないくらい、緊張もしていたんだろう。それが、こうして眠る事になって、ようやく解放されたってとこかな。
　携帯電話で時間を確認する。
「って、意味ないんだった」
　つい普段の習慣で見てしまうが、これはこの先役に立たない。
　どこかに時計がないのかな……。
　部屋を見回すが、壁には時計が掛かっていない。
　時計がないと不便だなって、今になって思うようになってきた。普段は気にしないで生活してたけど、やっぱり必要なんだな。
「しょうがない」
　この部屋にある唯一の小さな窓から外を見る。
　半分くらいまでしか開かないが、外を見るくらいは問題ない。
　そこから見ると……隣の建物の壁しか見えなかった。
　そのせいで薄暗いが、どうやら夜中ではなさそうだ。
　ベッドのキヨカは、すやすやと眠っている。
　どうやら、バスローブのまま眠っているらしい。
「旅館の浴衣じゃないんだぞ」
　よくそんな格好で寝れるものだ。
「それにしても、こうして黙って寝てればな……」
　まあ、普段も別に悪い奴じゃないんだけど。
　色々と振り回される事が多いせいか、どうもそう思ってしまうが、この旅の大切なパートナーだ。

「今はゆっくり寝てもいいのか」
　いざって時に頑張ってもらわないといけないからな。休める時には、ゆっくり……だよな。
　ふと、自然とキヨカの左手を見てしまう。
　昨日は、できるだけ西部雅子さんに見えないように隠していたが、その左手は気になってしまう。
　白いオープンフィンガーグローブは、包帯よりはマシだろうが、目立つ事に変わりはない。
「だからって、なにもないのもな……」
　あまり見せないので、俺もほとんど覚えていないが、蜘蛛の形をした痣は、男の俺でも隠そうと思うだろう。ましてや、女の子だったらなおさらだ。
「俺だったらよかったのかな……」
　それは、考えてもしょうがないのはわかる。
　俺たちが望んだわけじゃない。
　卑怯かもしれないが、俺たちは選ばれただけだ。望んで今の立場にいるわけじゃない。
　……だけど、選ばれたからには、やり遂げる。
「夜這(よば)い？」
　ふとそんな声で、現実に引き戻された。
　下を見ると、キヨカが目を開けている。
「いいよ」
　布団で顔を半分隠しながら言われる。
「……」
　一瞬、不覚にもドキッとしてしまった。
　なんだこれは。キヨカ相手にそんな風に……。
「違うっての。ただ、時間を確認しようと思っただけだ」
　冷静さを装う。
　一瞬だけ戸惑っていた時に、運良くベッドの所にデジタル時計が埋め込まれているのを見つけられてよかった。
　キヨカは、ふぅん……と疑っているようだ。
「別に、トールちゃんならいいのに」
「だから、そんな事は言わない方がいいぞ。俺じゃなかったら、どうなってるかわからんぞ」
　ったく……。誰彼構わずそんな風にしてると、本当にどうなるか。世の中、冗談のつもりがマジになる事だってあるんだからな。
　なんとか誤魔化しつつ、目は時計を見る。
　……早起きなのか？
　七時二五分だった。
　俺の普段からすれば早い方だけど、とびっきり早いというわけでもない。少しだけゆっくりできるかな……という時間だ。
　しかし、この旅の間は、それくらいは気にしなくても大丈夫だ。

「お前も起きたんならさ、着替えて街を探索しようぜ」
「……ホント、トールちゃんは……」
　キヨカはなにか言いたいようだったが、そんなものに付き合ってられん。
「しょうがない。私も着替えるよ。それにしても、ゆっくり眠れたよ……」
　キヨカは伸びをして体を起こす。
「じゃあ、シャワーでも浴びようかな」
　そう言うと、キヨカは浴室に向かう。
　朝からシャワーね……。
　それはいいかもしれない。俺も後で浴びよう。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　シャワーを浴びて、着替えもすませる。
　特に忘れ物もない。
　それらを確認して、俺たちはホテルをチェックアウトする。
　食事のない宿なので、どこか朝食を食べる場所を探さないといけない。
　ここへはタクシーだったので、場所がよくわからない上に、そもそもの地理がわからない。
　絶対にここへ行かないといけないって場所がないから、それはどうでもいいといえばいいんだけど。
「朝飯、どうする？」
「コンビニ……はなさそうだよね」
「そうだな」
　そもそも、この世界にあるのかわからない。少なくとも、見える範囲にはそれらしいものはない。
　どこか、朝から営業しているファストフードの店でもないだろうか。
　そう思うが、ここはどうやらホテル街らしく、そういった店が見つかりそうもない。
　そんな通りを抜けると、仕事へ向かうのだろうか、スーツ姿のサラリーマンっぽい人たちが歩いている。
　その光景は、俺たちが知っている通勤風景と変わらないように思える。この世界でも、みんなあくせくと働いているのだ。
　そりゃそうか。
　とにかく、空腹の俺たちは、適当に歩いていく。この人たちについていけば、駅かどこかに着くだろう。
　俺たちはトロリーケースが邪魔にならないように、できるだけ端を歩く。それでも、俺たちは邪魔になってそうだけど。
「なんか、すごいね」
　ぼんやりとしているが、その気持ちは俺にもわかる。
「そうだな。通勤ラッシュなのかな？」
「なにか食べたいね……」
　そんなこんなで歩いていると、喫茶店を発見した。
「キヨカ、あそこはどうだ？」
「うん、いいかも」
　俺たちは、人の波を外れて、喫茶店に入る。
「いらっしゃいませ」
　と、ニコニコ顔のおばちゃんに迎えられる。
「お二人ですか？」
「はい」

「じゃあ、こちらへ」
　俺たちは案内された席に座る。
「なににします？」
　おばちゃんは、水を俺たちの前に置きながら訊く。
　そうだな……。
　ぱっと目に入ったし、この時間なら当然か。
「モーニングをお願いします」
「私も」
　キヨカも慌てたように、俺に続いた。
「少々お待ち下さい」
　そう言うと、おばちゃんは奥へ入っていった。
　注文を終えてようやくゆっくりする。
「これからどうするの？」
　キヨカがそんな事を訊いてくる。
「そうだな……」
　俺は店内を見回しながら答える。
　店内は、いたって普通だった。シックでレトロな、それでいてオーソドックスな雰囲気だ。
　まさに喫茶店。
「ちゃんと考えてよね」
「そう言ってもな、どうすればいいのかわからないしな。昨日の感じだと、この世界で怪物が暴れているって感じでもないし」
「それはそうだけど……」
　そう言って、キヨカは自分の左手を見る。
「ねぇ、アーちゃんはどうしたらいいと思う？」
　いきなり左手に話し掛けた。
「おい、キヨカ……」
　いったいどうしたんだ……と思ったが、次の瞬間、頭の中に声が響いた。
〝我　情報が不足している　蟲(ベステート)の気配が微弱　おそらく　まだ覚醒しきっていないと推察できる〟
　おいおい、蜘蛛の声かよ。
「そうなんだ……。でも、覚醒前だったら封印するの楽だよね」
〝しかし　存在が希薄　察知困難〟
「そっか……。難しいな……」
　左手に話し掛けている姿は、周囲には奇妙に見えるだろう。俺だって、この声がなかったら、ちょっとおかしくなったのか……と思ったくらいだし。
「どうしたらいいのかな？」
〝我の助力なしで発見するか　覚醒を待つかの選択となる〟

「アーちゃんの力は、直接対決の時しか借りれないんだね」
〝現状では〟
「覚醒前だったら、この世界にはまだ影響はないんだよね」
〝影響は軽微だと推察できる〟
「ちょっと安心かも」
　キヨカと蜘蛛の話は続いているが、そこへモーニングが運ばれてきた。
　蜘蛛の声は俺たち以外にも聞こえるんだろうか。だったら、それはそれで問題だが、この場の説明は……どっちにしろできねぇ。
「お待たせしました」
　そう言って、俺たちの前にトースト二枚とベーコンエッグとサラダが置かれる。
「彼女、なにか人形劇の練習かい？」
　と、そんな事を訊かれた。
「えっと……どういう？」
　ぼんやりと誤魔化す。
「ずっと、一人で話しているみたいだし、なにか会話はしているみたいだけど、相手はいないみたいだし、なにかの台詞かい？」
　どうやら、蜘蛛の声は聞こえていないらしい。聞こえていたら、腹話術とでも思うだろうし。
「え、ええ、まあ、そんなとこです」
　曖昧にしておこう。
「じゃあ、練習頑張ってね」
　にこにこと去っていく。
　なんだか、微妙な感じだ。
　つうか、間が持てないよな、これ。
　キヨカはまだ蜘蛛と話しているし、俺も加わった方がいいんだろうけど、入りにくいよな。キヨカの左手に向かって話すのって、なかなかできるものじゃない。
　しょうがないので、トーストをかじる。
　シャクシャクと美味しい。バターがいいね。
　冷めないうちにベーコンエッグも食べる。
　玉子が半熟で旨い。それをカリッカリのベーコンにつけて食べる。
　おおっ。シンプルながら、なんかこういうのっていいな。
「あっ、トールちゃん、なに先に食べてるの」
　キヨカがぶぅぶぅ文句を言ってきた。
「別にいいじゃんか。お前は、蜘蛛と話してたしさ」
「トールちゃん、ヤキモチ？」
「違うわっ」
　それはない。つうか、そういうんじゃないと思うんだが。
「せっかく、一緒にいただきますしようと思ったのに……。どうして、先に食べちゃうかな」

「だから、お前がだな……」
「もういいよ。私も食べるから。いただきます」
　そう言うと、キヨカはベーコンエッグをトーストにのせて、もう一枚で挟んだ。
　おいおい、なんだかチャレンジャーな食べ方だな。
　玉子が半熟なので、押しすぎると潰れて、黄身が垂れてきてしまう。
　キヨカはそれを器用に潰さないようにしながら頬張る。
「うん、美味しい」
　確かに旨そうだ。
　俺もしてみようかな。
　もうバターをつけてしまったが、そこに玉子を絡めたベーコンをのせる。
　そして、シャクッと頬張る。
　あぅ……旨い。
　本当にシンプルなんだけどな。
　こうして、お店で食べると全然違う。
「美味しいね、トールちゃん」
「ああ、旨い」
　俺たちはあっという間に平らげてしまった。
　最後に残ったサラダをもしゃもしゃと食べていると、コーヒーが運ばれてきた。
「モーニングのコーヒーです」
　おばちゃんが嬉しそうにコーヒーを置く。
「あなたたち、そんなに美味しそうに食べてくれて嬉しいわ」
　おばちゃんはそう言うと、劇頑張ってね、とキヨカに言って戻っていく。
「ゲキってなに？」
「ああ、それはなーー」
　キヨカは蜘蛛との会話に集中していて気付かなかったみたいなので、おばちゃんとのやりとりを説明する。
「ふぅん、そんな事があったんだ」
　そう言いながら、サラダ菜をもしゃもしゃしている。
「そういうわけだから、あんまり人がいる所ではしない方がいいかもな」
「そうだね。誤魔化すのって面倒だし、そもそも私が変な子認定されちゃうのは嫌だよ」
「だよなぁ」
　説明しようにもできないし、かといってずっと劇の練習です……なんて無理だ。
「それで、どうだったんだ？」
「どうってなにが？」
　サラダ菜をくわえたまま喋る。
「蜘蛛と話してただろ。なにか情報はないのか？」
「トールちゃんも、アーちゃんの声が聞こえないの？」

「……アーちゃんってのはなんだ？」
「名前だよ。だって、アラネーオだもん。だから、アーちゃん」
　マジかよ。
　まさか、蜘蛛にそんな名前を……って、キヨカなら別に不思議はないのか。
「まあ、そのアーちゃんから、なにか手掛かりはなかったのか？」
「トールちゃんも聞こえないの？」
　また聞かれた。
「いや、聞こえてたけどな」
「……だったら、いいじゃない」
　冷たい視線が。
　痛いぞ、その視線。
　まあ、わからなくもないのか。
「トールちゃんって莫迦なのかな？」
「わかったわかった。俺が悪かった」
「わかればよろしい」
　なんだかな……。
「とにかく、手掛かりはなし、と」
「そうだね。どうしたらいいのかな」
「蟲(ベステート)の覚醒を待つのは危険だし、かといって、覚醒前は見つけにくい」
　どうすればいいんだ？
「だったら、とにかく探すしかないよね」
　キヨカは笑顔で言う。
「確かにそうだな」
　それがいいのかもしれない。
　っていうか、それしかないだろうな。とにかく、手掛かりを探すしかない。
　そもそも、どうやって訊くのかが問題だけどな。
　まさか、蟲(ベステート)を見ませんでしたか、なんて訊けるわけないし。
　サラダを食べ終えて、コーヒーを飲んで一息つく。
「とにかく、街を歩いてみようよ」
「そうだな」
　キヨカの提案に同意するしかない。他になにも思い浮かばない。
「それじゃ、行こうか」
「そうだな」
　俺たちは精算を済ませて、喫茶店を出る。
　ほんの少しの時間だったが、外は人が少なかった。
　どうやら、通勤ラッシュは終わったようだ。
　少し閑散と感じるのは、あれを知っているからだろうか。そもそも、これが普通なのかもしれ

ない。
「どこから行く？」
「どこでもいいよ。とりあえず、歩いてみる？」
「そうだな……」
　別になんの変哲もない街に見える。
　駅前には商店街があって、少し離れたら住宅街があって……。俺たちが知っているのと変わらない気がする。
　ただ、どことなく古い感じがある。別に古ぼけているというわけじゃなくて、俺たちが日本史で習うような、そんな一昔前の雰囲気がある。
「それにしても、賑やかだな」
　駅前の商店街の方からは、威勢のいい声が聞こえてくる。
　俺たちの世界だと、商店街って比較的閑散としているイメージがあったけど、ここはそうじゃないみたいだ。
　そういえば、高い建物が少ないかも。そのせいかな、古っぽく感じるのは。
　大型の商業施設もなさそうだ。
「なんだか、賑やかだね。昨日の夜もそうだったけど、派手な感じがするね」
　キヨカはどこか浮き足立っているように感じる。
「なんだかさ、こういうのって婆娑羅(ばさら)っていうのかな。だとしたら、私たちって傾(かぶ)いてる？」
　唐突になにを言い出すんだ、こいつは。
「お前、最近、日本史で戦国時代辺りを習ったのか？」
「うん、そうだよ」
「それで、婆娑羅とか傾奇者(かぶきもの)とか習って、使ってみたくなったのか？」
「うん、そうだよ。わかっちゃうなんて、トールちゃんすごいね」
「お前な……。いきなりそんな事を言い出せば、そういう事かと思うだろ」
「そうかな？」
「わかりやすすぎるんだっての」
　キヨカは落ち込んでいるフリをする。
「せっかく習ったし、使ってみたいじゃない」
「他にはなんだ？　なにを習った？」
「えっとね……蘭奢待(らんじゃたい)とか？」
　やれやれ。それをどう日常で使うんだよ。
「それも、使ってみたいのか？」
「使えれば……。でも、そんなの無理だよね」
「無理に決まってるだろ。蘭奢待なんて、そうそうお目に掛かれるものじゃないだろ」
　あの東大寺(蘭奢待)だぞ。そんなの見るだけでもなかなかできそうにないんだがな。
「そうだよね。聞いてみたいんだけどな……」

　蘭奢待を聞香(もんこう)なんて、夢のまた夢だろ。そんなの、あの神様(神崎会長)だってできるかどうか怪しいぞ。
「それは俺もだけどな。つうか、なんでこんな話に……って、お前が婆娑羅とか言ったからだよ」
「別にいいじゃない。それに、こういうのって、婆娑羅じゃないの？」
「そうだな……」
　街を見回す。
　確かに、景気はいいし、活気もある。それに、装飾もやたらと派手な感じだし、昨夜の人たちも派手だった。西部雅子さんも、やたらと羽振りがよかった。
　もしかしたら、本当に婆娑羅なのかもしれない。
「そうかもしれないな」
「でしょ？　私、的確でしょ」
　キヨカは、えっへんと胸を張る。
「別に、自慢そうに言われてもな……」
　自慢するようなものじゃないし、キヨカの手柄ってわけでもない。
「だったらさ、この世界と少し違う私たちって、やっぱり傾奇者だよね」
「それは違うだろ。傾奇者ってのは、婆娑羅の頃を忘れられずに、そのまま続けていた人たちってとこだろ。だったら、俺たちは違うだろ」
「……そうだよね」
　肩を落としてしゅんとする。
　つうか、そこまでするような事か？
「なんだか、傾奇者ってカッコいいかもって思ったんだけどな……」
　それだけか。
　確かに、傾奇者って響きはカッコいいかもしれないけどな。楽しかった頃を忘れられずに、引きずってるだけって解釈もあるからな。
「でもまあ、この時代が婆娑羅かどうかはわからないけど、少なくとも俺たちの時代よりは婆娑羅っぽいし」
　不景気だ、就職難だといわれている俺たちの時代からすれば、景気もよさそうだし、婆娑羅といってもいいかもしれない。
　そもそも、戦国時代の婆娑羅と呼ばれていた光景を、誰も実際に知らないし。
　それを現代風にしたら、こうなるのかもしれない。
「つうかだな、それよりも蟲(ベステート)の手掛かりだろ。それがないと、どうしようもない」
「だけど、アーちゃんも探せないって。確かにこの世界で、この近辺らしいんだけど、詳細がわからないらしいんだよ」
　そういや、喫茶店でそんな事を言ってたっけ。
「でもまあ、この辺なら、あまり遠くへ行かない方がいいのか。それに、実際に蟲(ベステート)が出現したら、大騒ぎになってるだろうしな」

　あれだけの存在が現れたら、破壊行動がなくても騒ぎになるだろ。あれを友好的に見る事はないはずだ。
　突然変異の生物という事ででも、話題になるはずだ。世界が違っても、その認識は変わらないと信じたい。
「とりあえず、街を歩こうか。ほら、あそこにデパートがあるよ」
　キヨカは目を輝かせて、駅の近くにある大きなデパートに向かって走り出した。
「お、おい……」
　慌ててキヨカを追う。
　勝手に行動するなよな。
　そもそも、デパートにいるとは思えないんだけどな……。
「ったく……」
　一緒に行動していないといけないってのは、この先も大変かもしれないな。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　見失わないように、走ってキヨカを追わないといけない。まるで、子どもが勝手にうろちょろして、それを捜している親の気分だ。親になった事はないけど。それでも、擬似的にこういうのなんだな……って思える。
　デパートのガラスドアは、自動ドアじゃなく手動だった。
　それを押して開け、中に入る。
　中に入ると、ひんやりとした空気に包まれる。
　この世界はまだ五月だったはずだ。それでも、少しひんやりとしている。
「トールちゃん、こっちだよ」
　恥ずかしいな。
　キヨカはぴょんぴょんと跳ねながら、俺に向かって手招きする。他人のフリをしたい。
「騒ぐな、莫迦」
　こっちの方が恥ずかしい。顔が熱くなる。
「静かにしろっての」
　キヨカの腕を引いて、その場を離れる。周囲の目が痛い。
「トールちゃん、強引だよ」
「莫迦かお前は。こんなとこで、大声出すなっての」
「そんな事言っても……」
　そういや、基本的にこいつは田舎育ちだったか。逢稀はもとより、栄琉もそれほど都会ってわけじゃない。それを考えれば、理解できなくはないんだが……だからこそ、田舎者丸出しってのはどうなんだろう。
「とにかく騒ぐな。それと、勝手にうろちょろするなよ」
　どこの小学生に言ってるんだろう。そんな気分にさせられる。
「じゃあさ、お洋服見ようよ」
　そう言うと、また勝手に歩きだしたので、キヨカの手を掴む。
「んもう……」
　キヨカはむくれるが、だからどうした。
「言ったそばから、勝手に行くなっての。勝手な行動禁止な」
「……わかったよ」
　渋々っぽいが頷いた。
　ったく……。俺は別に保護者じゃないんだけどな。
「で、服だっけ？　適当に見ていくか」
　本当は蟲(ベステート)の情報を得ないといけないんだが、少しくらいいいだろう。俺だって、この世界を色々と見てみたい。
　だって、自分たちがいた世界だぞ。そんな経験、まずできないからな。だったら、ゆっくり堪能したくもなるってもんだ。

「うん」
　キヨカは嬉しそうに頷く。
「じゃあ、一緒にね」
　俺たちは、手を繋いで……としたかったが、トロリーバッグを持って、さらに手を繋ぐと色々と邪魔になってしまう。
「いきなり走ったりするなよ」
　そう注意しておいて、キヨカの先導でデパート散策を始める。
　普段からデパートって来ないからわからないんだが、全体的に派手な感じがする。
　平日だと思うんだが、人も多く賑わっている。
「なんだか、変な感じだね。こんなのが流行ってるんだ……」
　キヨカは色々と服を見てはしゃいでいる。その間、キヨカのトロリーバッグは俺が持つ事になる。
　俺は流行には疎い方なので、今の流行もよくわかっていない。でも、やっぱりなんだか、ここのはちょっと昔だな……って感じはわかる。
　しかし、女ものの服を見ていても、俺としては退屈なだけだ。
　よく女性の買い物に付き合うのは大変だって言うけど、本当にそうだな。これは拷問か、なにかの罰ゲームとしか思えない。
「まだなのか？」
「なにが？」
「いや、まだ見るのか？」
「当然だよ。まだ見始めたばかりじゃない」
　マジかよ。
　確かに時間にすればそれほど経ってないんだろうが……って、時間がわからないんだって。
　少なくとも、体感時間ではかなり経ってる。
「まだまだこれからだよ、トールちゃん」
　にこやかに笑みを向けられてもな……。
　やれやれ。ため息しか出ない。
「ちょっと、休んでてもいいか？」
「うん」
　キヨカが見える範囲で休めそうなベンチがあったので、そこで座って待つ事にした。
　それにしても、なにが面白いんだか。
　服を取っ替え引っ替え……しかも、同じようなものばっかりだぞ。
　適当に、好みの柄とサイズでいいんじゃないか。
　まあ、そうやって選んでるのが楽しいんだろうな。
　ぼんやりと店内を見回す。
　基本的に、俺が知っているデパートと変わりはない。雰囲気がちょっと古い気がするだけだ。
　郷土研究とは違うが、過去を体験していると思うと、なににも勝る資料なんだろう。

　本当なら、色々と調査して、レポートを……って、そうだよ、レポートだよ。それを書かないと、進級が危ういんだった。
　ちくしょう。なにか、小型のパソコンでも持ってくればよかった。ノートに手書きして、あとで入力なんて、手間でしょうがない。
　準備の時に、すっかり忘れてしまっていた。まさか、この旅にそんなものが必要なんて、誰が思い浮かぶってんだ。
　それに……この世界は、俺たちの世界じゃない。歴史なんかも違うんだろう。だったら、あまり参考にならないかもしれないな。
　それでも、目に付いたものなんかは、ノートに書いておこう。なにかの役に立つかもしれないし、思い出にはなるだろう。
　まだそんなに経ってないから、見聞は少ないけど、それでも昨日の夜に話した事や、気になった事を書き留めておこう。

「トールちゃん、なにしてるの？」
　ノートにこの世界の事を書いていると、キヨカが覗きこんできた。
「ちょっと、この旅の記録をな。俺はレポートを書かないと、留年の危機だからな」
「でもさ、ここって私たちの世界じゃないじゃない。そんなの意味あるの？」
　キヨカもそう思うか。誰でも同じなんだろうな。
「とにかく、レポートにできなくても、記録にはなるだろ」
「思い出って事？」
　ストレートに言いやがる。
「そうだ」
「トールちゃんって、日記書くような趣味あったんだ」
「いや、別に普段は書かないぞ」
「まあ、そういう事にしておくよ」
　つうか、含み笑いはやめろ。本当に、普段は書かないっての。
　反論すれば、余計にややこしい事になりそうなので、そのままでいいだろう。
「ねぇ、お腹空かない？」
　いきなり、なんだ。
　つうか、さっき喫茶店でモーニングを……と、俺も少し減ったかもしれない。
「そういやそうだな。ちょっと小腹が空いたかも」
「っていうかさ、もうお昼なんだよね」
　と、キヨカが指した方を見ると、時計があった。
　こんな所に時計があったのか。
「おおっ」
　って、本当に昼だ。
　この世界の時刻表示が俺たちの世界と同じなら、現在は正午を少し過ぎた頃。

　もう、そんなに経っていたのか。
「そういう事だからさ、なにか食べようよ」
「そうだな」
　書きかけのノートをしまい立ち上がる。
「どこかいい感じの店があるといいな」
　ここはデパートなので、色々な店があるはずだ。そこには、レストランだってあるだろう。
「どうする？　上の方にはレストランがあるみたいだけど、なんだか高そうだよ」
　それは物理的なものか――なんて、くだらない冗談はやめておこう。金銭的にだろうな。つまり、高級そうなレストランばかりっぽいって事か。
　そりゃ、家族連れだって来るだろうから、お手軽なメニューだってあるだろうけど、昨日の西部雅子さんの羽振りのよさを考えると、この世界は……もしくはこの地域は、お金持ちばかりなのかもしれない。そうなると、自然と店もそういう人向けになる。
　俺たちだって、お金がないわけじゃないが、やっぱり無駄遣いはできないわけで、節約しないといけない。
「地下に食料品売場があるから、行ってみようよ」
「そうだな」
　キヨカの提案に賛同する。それがいいだろう。
　総菜だってあるだろうし、デザートだってあるだろう。スーパーやコンビニで買うよりは高いだろうけど、そこそこの弁当だってあるだろう。
　俺とキヨカは、エレベーターに乗り込んで地下に移動する。食料品は、地下一階と地下二階にあるようだが、地下二階は和菓子や洋菓子のお店がほとんどのようだった。キヨカは、後で絶対に行くと言っているので、反対したところで行く羽目になるんだが、とりあえず総菜なんかを扱っている地下一階に向かう。
　地下一階は、お昼時という事もあるのだろうか、上の階と比べると、圧倒的な賑わいだった。
　あちこちの店からは、威勢のいい声が聞こえてくる。それにつられるように、それぞれが買い物をしている。
　そうかと思えば、いい匂いがあちこちからしていて、それだけで涎が止まらない。それに加えて、なにかを焼いている音。なにかを揚げている音。それらが相乗効果となって、俺たちの胃袋を刺激してくる。
　ここに来るまでは、それほど空腹感はなかったが、この匂いを嗅いでしまうと、なにか食べたくてしょうがなくなる。
「トールちゃん、これは難しいよ」
　珍しくキヨカが難しい顔をしている。
「なにが難しいんだ？」
「どれもこれも美味しそうで、なにを食べていいのか決められないよ」
「……なるほど」
　それは俺も同感だ。

　総菜ひとつにしても、どの店のも美味しそうで、できるなら全部食べたいくらいだ。
「あのコロッケ、揚げたてだって」
「おいおい、あそこのお好み焼きも旨そうだぞ」
　これは、本当に難しそうだ。
　ざっと見た限りは、俺たちの知っている世界と大差はなさそうだ。変な食品はないようで安心する。
　しかし、どれもこれも、少しだけ割高感がある。つうか、普段は安物しか食べてないってのがあるんだけど。デパートだと考えると、普通なのかもしれない。
　しかし、それほど高くはないので、許容範囲内だ。それが、余計に迷わせる原因になっている。高すぎれば、選択肢から外せるのだが、どれもこれもほどほどなのが憎い。
「本当に選べないよ」
「そうだな。マジでどうするかだな……」
　俺たちは、通路に突っ立ったまま、途方に暮れていた。
　っていうか、俺たちってこの世界を楽しんでるな。
「トールちゃん、なにか少しずつ食べようよ。二人で分けたら、色々なものを食べられるよ」
「それいいな」
　これと決めずに、歩きながら気になったものを、二人で少しずつ食べれば、色々と味わえる。
「じゃあ、早速……」
　そう言って、キヨカはコロッケをゲットする為に向かう。
　揚げたては旨いだろ。それを一つ購入して戻ってきた。
「トールちゃん、半分こね」
　そう言うと、キヨカがコロッケにかぶりつく。
「あふっ、あつぅ、あっ、はふぅっ」
　はふはふとしながら、熱々のコロッケを食べる。
「ほは、ほーるはんも」
　口をはふはふさせながら、食べかけのコロッケを差し出される。
「お、おう」
　キヨカが持っているコロッケにかぶりつく。
「はふっ、おっ、はふっ、はぅ」
　熱っ。
　でも、ほくほくで旨い。
　揚げたてってのもあるけど、この絶妙なほくほく感がたまらない。
「もう一口」
　キヨカがはふはふとかぶりつく。
「俺も」
　そう言うと、キヨカが差し出してくれたので、それにかぶりつく。
　二人で一つのコロッケをはふはふさせながら食べる。

……これって、端から見たら、バカップルなんじゃないのか？
いや、冷静に考えるのはよそう。
「美味しかったね」
「ああ、そうだな」
これなら、何個でも食べれそうだ。それ以前に、もっと食べたい。でも、コロッケだけで満腹になるのはもったいないだろ。
「次はどれにする？」
なんだか、縁日の屋台かのように、俺たちは通路に並んでいる店を見ていく。
「これなんて、どう？」
「おい、あれなんてどうだ？」
と、場違いなほどに騒ぎながら、俺たちは昼食を満喫した。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　食料品のフロアは、さすがに昼時の賑わいはなかったものの、それでも客が溢れていた。
「どんだけいるんだよ」
　普段、デパートに行く事がないので、元の世界がどうなのかは知らないが、こんなに賑わってるのは、なんだか意外だった。デパートといえば、高いもの、高級品というイメージがあったので、俺のような庶民……というか、学生には縁のない場所だ。
　たいていのものは、ディスカウントの店や、近くのスーパーなんかで事足りる。
　特に買う気はなく、適当に見ているが、普段スーパーで見ているよりも少し高いような気がする。もっとも、スーパーが安いって事なのかもしれないが。
　相場がわからないので、比較できないんだが。
　それにしても、セレブっぽい人はいないな。結構、ふつうのスーパーで見かけるような感じの人ばかりだ。
　もしかして、この世界にはそういうのがないのかな。だとすれば、これが当たり前って事になる。
　なるほど。
　こうしているだけで、この世界の事を色々と知れるものだ。
　食料品を見ているだけなのに、こんなに気になってしまっている。
　この旅は、かなり面白いのかもしれない。こりゃ、本当にレポートを残したい。
「でも、無理なんだよな……」
　さすがに、他の世界のレポートなんて、提出するわけにはいかないだろ。
　でもまあ、自分のための記録としてならいいかも。
「結局、旅の思い出か」
　ははは と苦笑する。
　食料品を見ていても、特に変わった様子はない。
　騒いでいる様子もない。
「こんなとこに蟲(ベステート)がいるわけないよな」
　手掛かりもなし、どこにいるのかわからない。本当なら、もっと色々な場所を、広い範囲を調べるべきなんだろう。デパートをうろうろしてていいのかな……。
　時計を見ると、そろそろ夕方頃だ。
「今日は、結局これだけになりそうだな」
　今からどうしようもないだろうし、この世界を知るためという事にしておこう。
　さてと、今日の晩飯はなににしようかな……。
　こうして、食料品を見ていると、ついそんな事を考えてしまう。一人暮らしをしていると、どうしてもそうなってしまう。
　二人分だし、なにか作った方がいいんだろうけど、この世界で調理ができる場所がないので、結局は調理済みのものになってしまう。楽といえば楽だけど、経済的じゃない。

　これは、キヨカと相談するか。
　ここでなにか買ってもいいし、昼間みたいにしてもいいし、他の店で食べるのもいいだろう。
「そうだ、今日の寝る場所」
　泊まる所も決まってないんだった。昨日は、西部雅子さんが決めたので、今日はどうすりゃいいんだ？
　宿があるんだろうか。
　なかったら、昨日の所に行ってみるしかない。
　そろそろ、なにかしら決めないとな。
　キヨカと合流して考えるか。
　キヨカがいる、元の階に戻る。

「トールちゃん、遅いよ」
　別れた場所に戻ると、なんだかご立腹の様子のキヨカがいた。
「遅いって言われてもな……。別に約束してねぇだろ」
「そんなの関係ないよ。女の子を待たせるなんて……。で？」
　そう言って、手を差し出してくる。
　ん？
　なんだ？
「トールちゃん」
　なんだろう？
「なんだよ」
「なんだよじゃない。おみやげは？」
「……」
　おいおい、おみやげって。
　そういや、そんな事を言ってたが、マジで買ってくるとでも？
「そんなの、買ってるわけないだろ」
「役立たず」
　即答でそんな事を言われた。
　なんだ、この敗北感というか、グサリとくるものは。
　俺が悪いのか？
　なにがなんでも、おみやげとしてなにか買ってこないといけなかったのか？
　なんだか、理不尽じゃないか？
「本当に使えないんだから」
　キヨカはぷんすかしている。
「別に、おみやげって……。そんなに怒るような事か？」
「重要だよ。おみやげは重要なんだよ」
「そんなに力説されてもな……」

　どうすりゃいいんだよ。
　勝手に機嫌を損ねられてもな……。
「とりあえず、どこかで晩飯でも食って、これからの事を考えようぜ。泊まる所も探さないといけないしな」
　キヨカのペースに付き合っているわけにもいかない。
「そうだね。じゃあ、トールちゃんの奢りね」
「はぁ？　……っていうか、そもそも、俺たちの金って、支給されたものだろうが」
　俺たちが持っている金は、旅費として渡されたものだ。確かに、借りているわけじゃないから、俺たちの金って事で間違いでもないんだが、そう言い切るのはなにか抵抗がある。
「でも、半分こしたでしょ。トールちゃんの分から出してよ」
「それはいいけど、結局はお前のところからも出すんだぞ」
「気分の問題だよ」
「そうですか」
　とりあえず、機嫌も直ったみたいだし、これでよかったのかな。
「とりあえず、ここを出るか」
「そうだね。夜も地下でもいいかもしれないけど、他のも食べてみたいな」
「じゃあ、早めに探そうか」
「そうだね」

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　地理が全くわからないので、どの辺りにどういう店があるのかがわからない。
　なんとなく、雰囲気で探していくしかない。
　幸いにして、俺たちの世界とあまり変わらないので、そこは大丈夫そうだ。
「なににしようかな……」
　ここでも、キヨカは楽しそうにはしゃいでいる。
　とりあえず、商店街のような感じで、店舗が並んでいたので、その辺りを散策する事にする。
　っていうか、デパートの近くで営業してて、経営は大丈夫なのか？　俺が心配するような事じゃないんだが、場所的にいいんだろうか。
　そんなのは杞憂だったようで、そこも人で溢れていた。
　どうやら、あまりデパートの商品とかぶらないようで、これはこれで繁盛しているようだ。
　デパートにもあった生鮮食料品も、個人商店は個人商店で賑わっている。
　そういや、スーパーの近くに商店街があって、八百屋とか魚屋とか肉屋があったけど、それぞれ成り立ってたもんな。
　やっぱ、俺にはわからないなにかがあるんだろう。
「こういうのって楽しいね」
　キヨカはクルクル回りながら言う。
　つうか、トロリーバッグを持ちながら回ると、周囲に迷惑だろ。
「はしゃぐなっての。周りの邪魔になるだろ」
「そうだね」
　てへり、と舌を出す。
「どこにする？」
　そんな仕草は全力で無視。
　商店街には、洋食屋や屋台でお好み焼きやたこ焼きを売っている店、鮨屋や和食の店や食堂がある。しかし、ファストフードの店は見当たらない。この世界にはないんだろうか。そういや、コンビニもないみたいだ。
「選べないからさ、ここにしようよ」
　キヨカは、なかなかシンプルな暖簾が掛かった食堂の前で立ち止まった。
「そうだな。色々なメニューがありそうだし、リーズナブルだろ。意外と、こういうのが一番なんだよな」
「御託(ごたく)はいいから、入ろうよ」
　そう言うなり、キヨカは暖簾をくぐる。
　中に入ると、いくつかのテーブル席があった。昔のドラマで見るような、まさに〝食堂〟といった感じだ。
　中に入ると、エプロンと三角巾を着けたおばちゃんがいた。
「いらっしゃい。好きな席にどうぞ」

「はぁい」
　キヨカは元気に返事をして、店内を見回す。
　そんなに大きな店ではないので、選ぶほどの席はないのだが、キヨカは店の両脇に四つずつならんでいるテーブルの、入って左の手前二つ目に座った。俺もキヨカの向かいに座る。
「いらっしゃいませ。注文が決まったら、声を掛けて下さいね」
　おばちゃんがお冷やをテーブルに置く。
「わかりました」
　キヨカは無邪気に答える。
　なんだか、少し恥ずかしいな……。
　さて、なにを食べようかな……。
　メニューはテーブルの上にも、お品書きとしてあるし、店内の壁に木の札が掛かっている。
　こういう食堂って、やっぱ色々なメニューがあっていいもんだな。それに、こういう店ってなんだか落ち着く。
　この世界は、俺たちの世界とは違って、なんだか景気がいいみたいで、基本的に割高感があるけど、こういうお店は、値段的にも馴染みやすい。
「どれにしようかな……」
　店内の札を見回す。
　うどんから丼ものや定食……と、どれも食べたくて迷ってしまう。
「私は決まったよ。トールちゃんは決まった？」
「……そうだな……」
　別に急かされているわけじゃないけど、早く決めないとなにを言われるかわかったものじゃない。どうせ、優柔不断だとか言うに決まってる。
「俺も決めた」
「すみませ〜ん」
　俺の言葉を聞くやいなや、キヨカがお店の人を呼ぶ。すぐに、さっきのおばちゃんが、は〜いと言いながらやってきた。
「お決まりですか」
　伝票を手にしながら、鉛筆をぺろりと舐める。
「私はね……唐揚げ定食。トールちゃんは？」
「俺は、チキン南蛮定食で」
　おばちゃんは、伝票にそれぞれの注文品を書く。
「唐揚げとチキ南ですね。少々お待ち下さい」
　俺たちにそう言うと、おばちゃんは奥に向かって、唐(から)とチキ南一丁と叫ぶ。
　なかなか庶民的で、俺としては好印象だったりする。
「なんだか、急にお腹が空いてきたよ〜」
　キヨカがお腹をさすりながら言う。
　言われてみれば俺もそうかもしれない。注文した途端、急に空腹感が。別にまだ調理の音や匂

いがあるわけじゃないのに、不思議なものだ。
「トールちゃん、これからどうするの？」
　急に真面目な声で訊かれた。
「これからって……とりあえず宿だろ」
「……それはそうだけど。蟲(ベステート)の方はどうするの？」
「それはだな……」
　それは、どうするのか見当もつかない。
　どこにいるのかもわからない。
　やっぱり、出現して暴れてくれないとダメなのかな……。この世界で騒ぎにならないと、俺たちには見つける手段がない。
　蟲(ベステート)探知機みたいなのがあればいいのにな。さすがに、そんな便利なものはないよな。あれば、旅に出る時に渡してくれそうなものだ。
　誰かに頼るわけにもいかない。
　これは、俺たちだけでなんとかするしかない。
「やっぱり、わからないよね」
　キヨカがため息を吐く。
「そうだな。正直、どうしたらいいのかわからない」
「どうしようか……」
「この世界は、特に異変がないみたいだし、騒ぎになっている節もない」
「そうなんだよね。この世界の人が気付かないような異変だとか、気付けないとか……」
「その可能性もあるな。でも、蜘蛛はなにも感じてないんだろ。さすがに、俺たちは誤魔化せたとしても、蜘蛛まで誤魔化せるとは思えない。楽観的かもしれないけど」
「そうだね。アーちゃんも、なにも感知できないだもんね」
　そうなのだ。俺たちの手助けとなるのは蜘蛛だけだ。その蜘蛛が、なにも感じれないという事は、本当にこの世界ではまだなにも起こっていないのだろう。
　しかし、この世界に来たという事は、間違いなくこの世界に蟲(ベステート)がいるという事だ。
「暴れる前になんとかしないとな」
　最初は逢稀(あき)村みたいな人が少ない場所だったけど、ここはそうじゃない。人が大勢いる。
　こんな場所で、あんな巨大な蟲(ベステート)が暴れたとしたら、被害がどれほどになるのか想像もできない。ちょっとした怪獣映画だ。
　ミニチュアじゃなくて、あれが実際に起こるのは、やっぱり想像できない。
　それは、俺がそういうものはもちろん、巨大な自然災害を経験していないからなんだろう。大学の関西から来た友達なんかは、昔に巨大地震を経験しているとか言ってるが、それも本当に赤ちゃんと大差ない頃なので、憶えてないらしい。
　もちろん、紛争なんかの経験もない。
　結局、俺たちはそういう身の危険は、どこか別の世界の出来事のように感じているんだろう。
　とことん平和ぼけしている。

「どうしようか」
　もう一度、質問が戻る。
「そうだよな。とにかく、色んな所を探さないといけないんだろうけど……」
「知ってる人もいないし、やっぱりあれだけだと、この世界の普通がわからないよ」
　どうやら、キヨカはデパートでただはしゃいでいただけじゃないらしい。ちゃんと、この世界の風俗について調べていたようだ。本当か？　とにかく、それに関しては信用しておこう。
「昨日の夜と、今日のあれだけじゃな……。賑わっていて、お前が言うように、確かに婆娑羅っぽいのは確かだ」
「そうだよね。やっぱり婆娑羅だよね」
　なんだか妙に嬉しそうだ。自分が言い出したのが認められたからなんだろうか。
「そうだな……。って、そうだ。明日はさ、西部雅子さんの所に行ってみないか？」
「西部さんのとこ？」
「そうだよ。結局さ、この世界で知ってる人っていったらあの人しかいないし、それに気にならないか？」
「……やっぱり、ああいう働く大人の女がいいんだ」
「なにを勘違いしてるんだ」
「だって、気になるんでしょ。まあ、あの人って美人だし、大人の色気もあるし……」
　おいおい。なにを拗ねてるんだよ。つうか、やっぱり勘違いしてるし。
「あのなぁ。俺が気になるのは、回転寿司だよ。そりゃ、あの人はそれなりに美人だったけどな」
　一応、このくらいはからかってもいいだろう。
「やっぱりそうなんだ。そうだよね……。トールちゃんも男だもんね」
「はいはい。せっかくだし行ってみようぜ」
「なんだかな……」
「お前な。あの人が気になるってのは冗談だって。気になってるのは、本当に回転寿司だけだから」
「……うん、わかってるよ」
　言うと、キヨカはケロッと真顔になる。
「お前……」
　どうやら、キヨカも俺をからかっていたらしい。
「まだまだだね、トールちゃん」
　ニタニタと笑われるのはいい気分じゃない。
　そこへ、おばちゃんがお盆を持ってやってきた。
「お待たせしました」
　と、俺たちの前に、それぞれメインの皿と、ご飯が盛られたお茶碗、漬け物の小皿、味噌汁が入った椀と、煮物が入った小鉢を置く。
「それじゃ、ごゆっくり」

　おばちゃんはにこにことして戻っていく。
「うっわぁ～、すっごい美味しそう」
「そうだな」
　ほかほかの湯気と、香ばしい匂いが食欲をそそる。
「いっただきま～す」
　キヨカは手を合わせて、早速唐揚げを頬張る。
「はふっ。ん、んっ、はむっ、おいひぃ」
　俺も手を合わせて、味噌汁を飲む。
　なかなかいい感じだ。
　それから、メインのチキン南蛮を一切れ、口に入れる。
「……んっ」
　ジューシーで、口に入れるとじゅわっと広がってくる。それに、かかっているタルタルソースも旨い。チキン南蛮って、こんなに旨いものなのか。
　って、コンビニ弁当くらいでしか食べてないけどな。
　そりゃ、あれと比べるのが間違いなのか。
「トールちゃん、それ一つちょうだい」
　言うが早いか、キヨカの箸が俺のチキン南蛮をかっさらう。
「おい、じゃあ、その唐揚げも一つくれよ」
「やだよ。私の分が減るじゃない」
　キヨカが皿を持って、俺から遠ざける。
「お前、俺のは取っておいて、そりゃないだろ」
「いいじゃない。ケチ」
「ケチはどっちだよ。唐揚げも旨そうなんだし、分けてくれてもいいだろうが」
「しょうがないな……。惨めなトールちゃんに、私からの慈悲だよ」
　なんだか非常にムカつく。
　こんな風に言われるのは心外だ。
「ん？　どうしたの？　お恵みはいらないのかしら？」
　キヨカが口を歪ませる。
　こいつ……。確信犯だよな。
　ここは、プライドを捨てるべきなのか、それとも屈しないべきか。
　そんなの考えるまでもないな。
「キヨカ様、どうかお恵み下さいませ」
「うわっ」
　俺の決断に、キヨカが少し引いたのがわかった。
「なんでもいい。その旨そうな唐揚げは食べておきたい。次があるかわからんからな」
　この世界にいつまでいれるかわからないし、そもそももとの世界でこの味が味わえるがわからない。やはり、この世界でしか無理なのかもしれない。まさに一期一会だ。この機会を逃せば、

一生出会えないだろう。大袈裟かもしれないが、それだけの価値はある。
「トールちゃんは、プライドとかないわけ？」
「この場のプライドよりも、この場の唐揚げの方が重要だ」
「……それはそれで清々しいね」
「だろ？」
「でも、男としてそれはどうなのかな……」
「人間の三大欲求を満たす方を選択する」
「言い切った。なんだかもうどうでもいいよ。ほれ、一個やるよ」
　キヨカは、唐揚げをぐさりと箸で刺すと、俺の皿の上に落とした。
　なんだか非常にムカつく。
　作法とかそういうのはどうでもいい。
　しかし、ムカつくのはどうでもいい。今は、あの旨そうな唐揚げだ。あれを食べれるならいいさ。
「いっただきま～す」
　キヨカから恵んでもらった唐揚げを頬張る。
「うわっ」
　噛んだ瞬間、じゅわっと肉汁が溢れてきた。
「熱っ。旨っ」
　肉汁が熱々だ。肉もすっげぇ旨い。
　居酒屋で食べてる唐揚げなんて、比じゃないね。
　つうか、この世界で食べたものって、全部が旨い。俺たちの世界となにが違うんだろう。
「美味しいよ……」
　キヨカは唐揚げを頬張ってからご飯をかき込む。
「旨い旨い」
　俺もキヨカと話すのももったいない。口を開けると、この旨さが逃げていってしまいそうだ。
　俺もキヨカも、それからは無言で目の前のご飯を食べる事に専念した。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　店を出ると、もう日も暮れていて、サラリーマンたちが闊歩していた。居酒屋もちらほらとはあるものの、本格的な飲み屋は別の場所に集まっているのだろう。どうやら、夕食を摂(と)ろうとする人たちのようだ。
「どうしようか」
「そうだな……」
　それだけで通じる。
　これから、今日の宿だ。
　この周辺にはなさそうだし、場所がわかるのは昨日泊まったあのホテルだけだ。
　今日もあそこかな……。
　あまりいい感じはしなかったので、できれば普通のビジネスホテルの方がいい。ああいう場所は、どうもな……。
　そうなると、この辺の地理がさっぱりわからない俺たちは、途方に暮れるしかない。
「誰かに訊いてみる？」
　それが一番なのはわかるのだが、どこか泊まれる場所はないかって質問は、個人的な感覚だけどしづらいんだよな……。こうして二人でいると、どうしても昨日みたいな場所を紹介されそうな気がする。自意識過剰とか被害妄想でもなんでもいいけど、俺としてはそう感じるんだ。
「でも、昨日みたいな場所は、ちょっとな……」
「そうかな。私はそこそこ楽しかったけど」
　どうやら、キヨカはまんざらでもなかったらしい。
「俺はもっと普通がいい。それこそ、カプセルホテルでもいいぞ」
「それはそれで楽しそうだね」
　キヨカはなんでも楽しめそうだな。
　かくいう俺も、カプセルホテルには泊まった事がないから、実際はどういう感じなのかはわからない。でも、昨日のあれよりは普通だろう。
　そもそも、ゆっくり休めればいいんだ。
　できれば広々とした所でくつろぎたいが、あまり贅沢はできない。
「携帯が使えたらいいのにね」
「そうだな」
　ナビとか検索ができれば、こういう悩みは解消なんだけどな。
　それを考えると、俺たちって便利すぎる環境にいたんだな。それが当たり前になってたけど、むしろ今いるような環境が普通なのかもしれないな。
　それでも、便利に慣れてしまった俺たちには、この世界は不便でしょうがない。
　検索するようなツールもないし、本当にどうすればいいんだろう？
　コンビニも見つからないし、本屋でそういう情報が得られそうにない。やっぱり、立ち読みするならコンビニだしな。

「トールちゃん、どうするの？」
「そうだな……」
　俺の浅知恵だと、完全に手詰まりだ。どうすればいいんだろう。
「やっぱり、昨日のとこ行ってみようよ」
　全く乗り気じゃないが、最終的にはそうなってしまうのかもな。
　それが嫌なら、別の案を出さないといけない。しかし、代案は思い浮かばない。
　代案がない以上、反論や否定はできない。
「しょうがない。昨日のとこに行ってみるか」
「そうだね」
　俺たちは、昨日のホテルを目指して、とぼとぼと歩く。
　帰宅途中だろうか、サラリーマンが朝と同じように歩いている。違うのは、向かう方向くらいだ。
　遠くには、チカチカと明かりが見えている。
　様々な色のそれは、まるで虫を呼び寄せるかのようだ。
「なんてな」
　ぽつりと呟いた声を、キヨカは聞き逃さなかった。
「なに？」
「いや、別にたいした事じゃないさ」
「気になるよ」
「あのさ、向こうに光が見えるだろ」
「うん。赤とか青とか……ネオンが綺麗だね」
「あれがさ、虫を呼び寄せる光みたいだな……って」
「誘蛾灯(ゆうがとう)？」
「そうそう。あの光に向かって、この人たちが歩いてるみたいでさ」
「みたいっていうか、実際それっぽいよね。みんな、お酒を飲みに行くんじゃないの？　だったら、昨日のあの辺でしょ。……そういえば、またあの変な格好の女の人とかいるのかな」
「変な格好？」
「そうだよ。なんだかピチピチの服を着て、もわもわした扇子を持ってさ……」
　ああ、あれか。
「いるんじゃないか？　この世界じゃ、結構普通っぽいし」
「本当に普通なのかな？　今日見たお店には、そういうのがなかったし……」
「そうなのか。じゃあ、なにかああいうお店に行く時だけの服なのかもな」
「じゃあ、あの人たちって、お水とか？」
「それはわからないけどさ……。とにかく、みんな普通にしてたし、別に気にしなくていいんじゃないか？」
「そうだけど……。やっぱり、トールちゃんもああいうのが好きなの？」
　ぶふぉっと吹き出しそうになった。

「あのなぁ。俺は別にああいうのは、どうかと思うわけでだな……」
「好きなんだね。そうだよね。ボディラインがはっきり出てるもんね。胸が大きかったら、ボンキュッボンだもんね」
「おいおい。別に俺は……」
　話がキヨカの中で進行していく。
「いいんだよ。トールちゃんも男の子だもんね。思春期だもんね。むらむらするよね。……私はいいんだよ」
　おいおい、どうなってんだ？
　こいつは、いきなりどうしたんだ？
　なんか変なものでも食べたのか？
「だから、ああいうのは俺の好みじゃないっての」
「そうなんだ。トールちゃんはああいうのよりも、夜の蝶々さんたちみたいな、派手なドレスの方が好きなんだね」
　おいおい。なにがなんでも、そっちにこじつけたいのか？
　どうしたんだ、本当に。
　まあ、確かにあんなフィットした服よりも、行った事はないけど、俺的イメージのキャバクラで働いてる女性が着ているようなドレスの方が……。
　って、だからそうじゃなくってだな。
「そもそも、話がおかしいだろ。どうして、そういう話になってるんだよ」
「トールちゃんが好きかな……って思ったんだけど。こういう話、男同士だったらするんじゃないの？」
「……否定はできそうにないな」
「ほら。そう思ったから、私がしてあげたんじゃない」
「どういう発想だ。キヨカとそういう話をして、なにが楽しいと？」
「こういう話に寛容な女の子アピール？」
　疑問系かよ。
「そんなのアピールしてどうなるんだ？　しかも、俺に」
「それはだね……。言わせないでよ」
　バンと背中を叩かれる。
　その強さに思わず噎せる。
「ごめん。ちょっぽし強かったかな」
「お前な……」
　キヨカは誤魔化すように、あははと笑う。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

　そんなこんなしていると、昨日のホテルが見えてきた。
「なんだかな……」
　昨日を思い出すと、あまりいい気はしない。しかし、他に泊まれそうな場所がわからない。
　諦めるしかないのか。
「じゃあ、行こうか」
　こういう場所に、女の子が先導して入るのはどうかと思うが、当のキヨカが乗り気なのでしょうがない。
　ため息を吐きつつ、俺たちはチェックインを済ませる。
　料金は先払いなので、支払いも済ませる。
　思っていたよりも、安価だった。それでも、あの環境は好きになれそうにない。
　渡された鍵を見ながら部屋に向かう。
　どうやら昨日とは違う部屋らしい。
　ドアを開けて中に入ると、昨日と同じ感じのピンク色の内装だった。
　この内装はどうなんだろうね。
　しかし、昨日と違うのはベッドだった。
　部屋の真ん中に、円形をしたベッドがあった。
「すごいね、トールちゃん」
　キヨカはわきゃわきゃとはしゃいでいた。
　そして、ベッドにダイブする。
　おいおい、はしゃぎすぎだろ。
　呆れつつも、初めて見る円形のベッドに、単純に驚いていた。普段の生活で、円形のベッドなんて見る機会はないよな。つうか、普通の部屋にこんな変な形はいらないだろ。
「トールちゃん、すごいよこれ。ほら、動くよ」
「なにっ？」
　見ると、ベッドがゆっくりと回転している。
「なんだ、それ」
　ベッドが回るってなんだよ。すげぇギミックだ。
　動く必要性はわからないが面白い。
「もう、俺は疲れたから、風呂入って寝るぞ」
「そうだね。私も疲れちゃった。……でも、もうちょっと遊んでたいから、先に入っていいよ」
「じゃあ、遠慮なく」
　キヨカは回るベッドで遊んでいるので、先に風呂に入らせてもらう。確かに面白いよな。必要性は不明だけど。
　風呂は……やっぱり昨日と同じ感じだ。結構広いけど、こういうものなのかな。
　湯船に湯を張っている間、シャワーで体を洗う。

「それにしても、どうしたらいいのか見当もつかないんだよな」
　明日は、とりあえず西部雅子さんの所に行ってみようとなったが、行ってなにをするのかは決まっていない。
　おそらく、回転寿司に関してなにかをしているんだろうけど、俺たちができそうな事はないだろう。むしろ、邪魔になるんじゃないだろうか。
　だったら、行かない方がいいんだろうな。
　それでも、手持ち無沙汰になるので、顔だけ出すにしろ、行ってみよう。
　それに、なにか情報を得られるとしたら、訊きやすいのは彼女からだ。俺もキヨカも社交的というよりは、人見知りの部類だ。あいつは内弁慶だからな……。でも、最近はそうでもないのかな。この前、神崎グループ本社ビルに行った時も、結構堂々としていたような気がする。それなりに、度胸がついたというか、積極的になったんだろうな。
　そりゃ、変わってくるよな。成長なのかな、これも。
　髪と体を洗っていると、湯船にそこそこ湯がたまってきた。
　手を入れると、普通の湯だった。
「……昨日のは、なんだったんだ？　もしかして、キヨカがなにか入れたのか？」
　そうとしか考えられない。
　普通のお湯だ。これなら、ゆっくり浸かれば、疲れもとれそうだ。
　湯船が広いので、まだたまるには時間が掛かりそうだけど、ゆっくり浸かっている間にたまるだろう。
　まだ半身浴程度の湯船に座る。
「ふぅ～」
　思わずため息が出る。
　なんだか、極楽極楽と言いたくなってしまう。
　湯船に浸かりながら、首をこきこきと動かす。なんだか、気を張っているせいなのか、慣れない世界だからなのか、肩が凝った気がする。手で揉みほぐす。
「気持ちいいな……」
　大きく伸びをする。
　ゆったりと足を伸ばして入れるのっていいな。今の部屋は浴槽が小さいから、足を曲げないと座れないからな。学生の一人暮らしの部屋だしそういうもんだろう。他の連中はどうか知らないけど。同じようなもんだろ？　……もしかして、他の連中は、もっといい部屋だったりするのか？　違うと信じたい。
　そんなどうでもいい事を考えられるくらいには、寛(くつろ)げている。
「トールちゃん、まだぁ？」
　と、キヨカの声が。
「どうかしたのか？」
「私も入りたい」
　はぁっ？

「あのなぁ。やっと湯が入ったんだぞ。もうちょっと、ゆっくり入らせろよ」
「男のくせに長風呂？　烏(からす)の行水(ぎょうずい)でいいじゃんか」
「そんなの俺の自由だろ。ゆっくり疲れをとりたいんだよ」
「疲れって……。今日は、ほとんど休んでたじゃんか。それなのに、疲れてるとか……もう、そんな歳なんだね」
　なんだか、最後の方は憐れむような言い方をされた。ショックだ。
「歳なんか関係ねぇよ。とにかく、ゆっくり入らせてくれ」
「私も早く入りたいんだよ。……そうだ。一緒に入っていい？」
「……」
　言葉を失った。
「莫迦か、お前は。なに考えてんだよ」
「別にトールちゃんだし。私がいいんだから、トールちゃんは遠慮せずに、美少女の裸体を視姦すればいいじゃない」
　……おいおい、それが女子高生の言葉なのか？
　恥じらいとか、そういうのはどこいった？
　いやいや、それ以前に、自分で自分の事を〝美少女〟っていうのはどうなんだよ。
「俺は一人でゆっくり入りたいんだ。もうちょっと待てよ」
「意気地なしだね。せっかくのチャンスなのにね。やっぱり、不能なの？　それとも男色？」
「どっちでもねぇよ」
　なんつぅ会話だ。もうちょっと、恥じらいは必要だと思うぞ。
「本当かなぁ」
「だっ……」
　やばいやばい。
〝だったら試すか〟とか〝だったら確認してみろ〟なんて、言ったら大変な事になってしまう。
「なにかなぁ？　トールちゃん」
　俺の失言を見越した言い方だな。やばいやばい。あいつが入る口実を与えるとこだった。
　普通なら、歓迎すべきシチュエーションなんだろうな。全国の野郎どもが、どのくらいこの状況を羨ましがってんのか知らないが、実際はそうでもないんだぞ。そんな幻想は、とっとと壊れてしまえ。
「とにかく、ゆっくり入らせろよ」
「……じゃあさ、美少女が背中を流してあげるよ」
　また自分で〝美少女〟かよ。自意識過剰ってわけでもなさそうだし、もうこりゃ完全にネタなんだろうな。なので、あえてなにも言うまい。
「いらねぇよ。自分で洗う。……つうか、もう洗った」
「なぁんだ、残念。バスタオルを巻き付けた美少女に背中を洗ってもらうのって、男の子の夢じゃないの？」
「なんだ、それ」

　確かにそういうシチュエーションは、そういう関係では定番なのかもしれないが、俺は別にして欲しいとか思った事ないぞ。念のために、俺はちゃんと普通に三次元の女の子に興味があるからな。
「頑固だねぇ。ちぇっ。……わかったよ。もうちょっと、ベッドでぐるぐるしてるよ」
　そう言い残して、キヨカは戻っていったっぽい。
　やれやれ。
　ったく……。どうして、こんな事をせにゃならんのだ。
　ゆっくり浸かろうと思ってたのに、騒がしくてゆっくりできやしない。
　なんだか急かされてるみたいで落ち着かない。
　キヨカのやつ……。
「しょうがない」
　喋ってる間も浸かってたわけだし、あまり長い間浸かってるとのぼせてしまうよな。
　ざばっと湯船から出る。
　大雑把に体を拭いて脱衣所へ。
　そこには……、
「やっほぉ」
「っ！　おわっ！」
　バスタオル姿のキヨカがいた。
「お、おま、おま……」
　うまく言葉が出てこない。
「やっと出てきたね」
　キヨカはバスタオルを巻いたまま、さも当たり前のようにそんな事を言う。
「お前……なんで……」
　さっきベッドに戻ったはずじゃ……。
「だから、早く入りたかったんだよ。トールちゃんも出たし、入ってるね。じゃぁね」
　ひらひらと手を振って、浴室に入っていく。
「おっと、これはこっちに置いておこう」
　と、体に巻き付けていたバスタオルを、浴室の脱衣籠に入れる。
　思わず目を背ける。
「別に、見たっていいんだけどね。トールちゃんのは、ばっちり見せてもらったし」
　にゃははっ、と笑いながら、浴室に入っていく。
　俺のを見せてもらったって……。
　冷静に自分の現状を確認する。
　……。
　慌ててタオルで隠すが、既に遅い。
　俺は、驚きのあまり、タオルを持った状態でいた。
　風呂から出て、これからきちんと体を拭いて、着替えようと思っていたので、当たり前だが全

裸だ。
「……死にたい」
　キヨカは平然としてやがった。
　もうちょっと恥ずかしいと思ってくれれば、もっと早く気付けたのに。
　うわぁ……。
　顔を合わせづらい。
　でも、旅が始まったばかりだし、そんなわけにはいかない。ずっと、一緒にいないといけない旅だ。
「最悪だ……」
　もう、どうしたらいいんだよ。
　蟲(ベステート)よりも、どうしたらいいのかわからない。
　明日から……っていうか、今日この後すぐだが、どうやってキヨカと話せばいいんだ？　普通にできる自信はないぞ。
「つうか、堂々としすぎだ」
　慌てて、バスタオルで体を拭いて、服を着る。
「そうだ。私のバスタオル、くんかくんかしてもいいんだよ」
　浴室からそんな声が聞こえる。
　本当に、なにを考えてんだよ。そんな事したら、完全に変態だろ。
　とりあえず、ゆっくりしたい。ここにいると落ち着けない。
　脱衣所を出て、部屋に戻ってベッドに腰掛ける。
「あいつは……」
　きっと、なにを言っても無駄だろう。からかってるのか、マジなのか。
　からかってるつもりでも、相手を間違えると、本気になって大変な事になるんだぞ。相手が俺だから、なんとか平穏無事なだけなんだぞ。その辺を、どうにかしてわからせないといけないんだろうな。
　そんな事をぐだぐだ考えていると、キヨカがバスタオル一枚で出てきた。
「待ったぁ？」
　わざとらしい。
　しかも、バスタオルをちらちらとさせている。
　明らかにからかってやがる。
　まあ、湯上がりで、火照(ほて)ってるのは、相手が誰でも多少は色っぽく見えるもんだな。だけど、そこに反応しちゃダメだ。ここは無視。もしくは放置。
「……トールちゃん、反応ないと淋しいよ」
　無視＆放置していると、とうとうキヨカが負けを認めたようだ。
　相手にされないほど淋しいものはないよな。虚しいだけだ。だからこそ、効果があるってもんだ。
「そんな事してないで、普通に寝るぞ。っていうか、俺相手だからいいものの、他のやつにそん

な事したら、どうなっても知らないぞ」
「……わかってるよぉだ」
　ぷいっと拗ねているのがわかる。反省もしろよ。
「もう、疲れるんだから、くだらん事してないで、さっさと寝ようぜ」
　ばたんとベッドに倒れ込む。
「おっ、今日は一緒に寝るんだね」
　嬉しそうな声がして気付いた。
　がばっと起き上がって部屋を見回す。
　この部屋には、ソファがない。
　確かに昨日の部屋よりは小さい気がする。
　もしかして、昨日ってここよりもグレードの高い部屋だったのか？　西部雅子さんに手配してもらったので詳しくはわからないが、あの人ならそのくらいはしてくれてそうだ。
　やっぱり、気付かないところで、色々とお世話になってしまってるんだな。
　で、それよりも……だ。
　ソファがない。
　っていうか、ベッドくらいしか腰掛ける所がなかったから、自然とここに腰掛けていたわけだ。つまり、ソファで寝れないどころか、ここ以外は床って事になる。
　……マジかよ。
　床で寝るのは嫌だな……。
「どうしたのトールちゃん」
　キヨカがにやにやしながら訊いてくる。
　なんだか、キヨカのペースになってるぞ。ここままじゃダメだ。
「いや……今日はどこで寝るかなぁ」
　空惚(そらとぼ)ける。
　これは床を覚悟だな。
「誤魔化すのはダメだよぉ。一緒に寝ようよ」
　うっ……。
　なんだろうな。据え膳シチュエーションなのに、やっぱりそういうのは遠慮したいんだよな。
「女の私がいいって言ってるんだよ。なにを遠慮するのかな」
「布団も一枚しかなさそうだしな……」
　ひたすら話を誤魔化したい。
　掛け布団は一枚しかないし、予備なんてあるはずがない。
　だとしたら、俺が個人的に持っているブランケットで寝るしかないか。風邪ひかないよな、多分。
「トールちゃん。トールちゃんが男色だってもさ、私はいいんだよ。私の女としての魅力で、トールちゃんを真人間に戻してあげるよ」
「だから、俺は男色じゃないし。男色が真人間じゃないってのも偏見だ」

「やっと反応してくれたよ」
　にっこり笑顔のキヨカ。
「しまった……」
　思わず反応しちまった。
「にしし……」
　口に手を当ててにたにたと笑われる。
　ちくしょう……。
　完全にしてやられた。
「諦めて一緒に寝ようよ。別に、そういうイベントがなくてもいいからさ。それにだよ。これから先、やっぱり一緒に寝るような事もあるかもしれないし、その度にこうして悩むわけ？　男だったら、覚悟くらいしなさいよ」
　うっ……。
　確かにキヨカの言うとおりだ。この先、どんな環境なのかもわからない。
　野宿だって考えられるだろうし。そもそも、この環境が恵まれてるんだよな。
　俺たちがいた世界と、あまり変わらないっていうのが、そもそもラッキーなんだ。
「わかったよ。お前の言うとおりだな」
「わかったらよし。じゃあ、一緒に寝ようか」
「……そうだな。その前に、服は着ろ」
「あれれ？　そこはちゃんとするんだ」
「莫迦かお前は」
　さすがに、そういう事はしない。
　愚かだと言われようが、それは俺が決めた事だ。
「でもね、もしムラムラっときたら、いつでもいいんだからね」
　そんな事を宣(のたま)って、手をひらひらと振りながら、脱衣所に戻っていった。
「ったく……」
　疲れた……。
　でもまあ、あんまり深く考えてもしょうがないのかな。
　これから、どんな事になるかわからないんだし、別に俺が手を出さなけりゃいいだけの話だ。だったら、どうだっていいじゃないか。
　そうだよ。
　変に気負う必要なんてないんだよ。
「トールちゃん、お待たせ」
　パジャマに着替えたキヨカが戻ってきた。
「じゃあ、寝るぞ」
　先に布団に入る。
「せっかちだな……トールちゃんは。早すぎるのも問題だぞ」
　そんな事を言いながら、キヨカも布団に入る。

こいつは、なにを言ってやがるんだ。
これが乙女の台詞なんだぞ。変な幻想を抱いている野郎どもは、現実を直視した方がいいと思うね。まあ、幻想に逃げたくなる気持ちもわからなくはないが。
「そういえばさ」
「なんだ？」
「このベッド、回るんだよね」
「だから？」
「回すよ」
キヨカがなにかのスイッチを入れる。
「おっ」
すると、ゆっくりとだが、確実にベッドが回っている。
「なんだ、これ」
「面白いでしょ」
「よくわからんが、とにかくすげぇ」
ベッドが動くなんて、考えた事もなかったから変な感覚だ。
ゆっくりと回転するベッドか……。元の世界で提案したらどうなるんだろうな。
ノートに書いておこうか。
そんな事を考えながら、ゆっくりと目を閉じる。

緊張して、気を張っていたからか、思ったよりも熟睡できた。

(C)2012 STUDIO SAIX All Rights Reserved.

心の歌を奏でて　ー婆娑羅ー　㊤

http://p.booklog.jp/book/48884

著者：芳田尚哉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/48884

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/48884

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.